© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

YEC(若者エンパワメント委員会)

スウェーデン
視察報告書 2014

～若者が活躍する国 スウェーデンから学ぶ～

YEC(若者エンパワメント委員会)
電話：054-264-5268　Email：yec.information@gmail.com
〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1 静岡県立大学

Ⅰ はじめに

この「スウェーデン視察報告書２０１４～若者が活躍するスウェーデンから学ぶ～」は、YEC（若者エンパワメント委員会）が２０１４年６月８日から１５日までの約一週間、若者参画の先進的な国であるスウェーデン王国の施設や組織などへの視察録をまとめたものである。

はじめに、ストックホルムと静岡で私たちが実施した「若者 100 人アンケート」の調査結果が記載されている。次に、私たちがスウェーデンで実際に見たこと、感じたことを、施設・機関ごとにまとめている。

今回の視察では、スウェーデンの首都であるストックホルム、スウェーデン第二の都市であるヨーテボリの２つの都市を中心に、全部で１０の施設及び組織の、視察、ヒアリングを行った。

スウェーデンは、社会福祉の充実や、ワークライフバランス[1]の実現度の高い国であることで知られ、そのほかにも、世界的な家具販売店である IKEA や、低価格かつファッション性の高い衣料品を扱うアパレルメーカーの H&M など、国際競争力のある企業があることでも有名である。一人当たりの名目 GDP の２０１３年のデータでは、世界ランキングで７位と、最も裕福な国のひとつとしても、世界的に注目を浴びている。

そして、そんなスウェーデンは、若者参画について先進的な事例を多く持っている国でもあり、国の若者政策として、若者の社会的影響力を高めていくことを促進している。

YEC では、２０１２年にもスウェーデン王国を訪れ、スウェーデンの「ユースワーク」に焦点を当て、調査を進めてきた。しかし、実際に現地の方へのヒアリングをする中で、スウェーデンのユースワークの根幹にあるものは、「民主主義」の成熟があると感じた。

そこで、今回の視察では、「ユースワーク」の根底にある「民主主義」により近づくため、若者に対しての取り組みをしている機関のみならず、ウェブツールを用いて持続可能な民主主義の仕組みづくりをしている団体や、高齢者や障害者などの雇用弱者を進んで雇用している社会的労働組合などを視察に加えた。そうすることで、「ユースワーク」の根幹にあるスウェーデンの「民主主義」に対しての理解を新しい角度から考えることができる機会となった。

皆様には、この報告書を読むことで、スウェーデンの「ユースワーク」から、その根幹にある「民主主義」というものに触れていただき、日本国内で私たちはどう考え、行動していくことが必要なのかということを考えるきっかけになれば幸いである。

今回の YEC スウェーデン視察は、スカンジナビア日本ササカワ財団による助成をいただき、実施することができた。この場をお借りして、感謝申し上げる。

---

[1] 仕事と生活を共存させながら、持っている能力をフルに発揮し、それぞれが望む人生を生きること
（参考文献：IMF - World Economic Outlook Databases）

Ⅱ 目次

Ⅰ はじめに 2

Ⅱ 目次 3

Ⅲ YEC 紹介 4

Ⅳ 街頭アンケート 5

1 アンケート調査の概要 5

2 アンケート集計結果 6

3 アンケート結果からの考察 15

Ⅴ 訪問施設紹介 16

1. 直接民主党 “Direktdemokraterna” 16

2. FITTJA Ungdomens Hus（フィッチャ ユースハウス） 19

3. Musikhuset (ミュージックヒューセット) 23

4 Fryshuset（フリースヒューセット） 26

5 VoteIT(ボウトアイティ/ボウトイット) 30

6 全国生徒会連合（Sveriges Elevkårer） 34

7 ヨーテボリ市文化局 37

8 Frilagret(フリーラグレット) 42

9 ヨーテボリ大学文化健康センター 46

10 LeMat(リマット) ホテル 50

11 Solberg Behandlingshem och boende(トリートメントセンター) 53

12 Lärjeåns Café & Gardens 55

13 Kajskjul46（カイフー46） 57

Ⅵ まとめ 60

視察を通して各メンバーが得られたこと 60

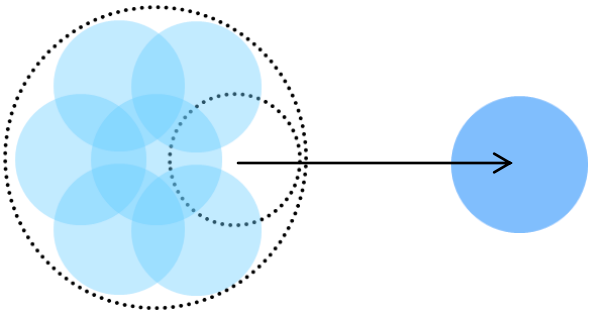
Ⅶ おわりに 64

© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Ⅲ YEC 紹介

ミッション(活動理念)
すべての若者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手となるために。

YEC(若者エンパワメント委員会)は、2009 年に静岡県立大学に設立された学生団体である。若者が社会に対して、「かやの外」のように感じているのではないだろうかということに問題意識を持ち、社会に対して他人事で、社会的影響力を持っていないと考えている若者たちを、共に社会形成をするパートナーとしてエンパワーすることを目的としている。



左側の円を社会と考えると、その外側に若者がいる。
これは、若者自身の認識でもあり、社会全体の認識でもあると考えられる。

エンパワメント（empowerment）の起源は、黒人の公民権運動であるとされている。力の欠如状態にあった黒人たちをエンパワー（empower）することにより、公民権の獲得につながったとされている。

英語にすると power が含まれているが、エンパワメントは決して、外部から力を与えることではない。人間はみな生まれながらにみずみずしい個性、感性、生命力、能力、美しさを持っている。

エンパワメントとは、この本来持っている力を発揮できるように、①無力化されている本人に働きかけて差別や偏見があっても力を発揮できるようにすること、②社会全体に働きかけて差別や偏見を減らすことである。

YEC の活動に当てはめると、若者自身に働きかけてその自己肯定感を高めることと、社会全体における若者に対する、ステレオタイプな(型にはまった)認識を変化させていくことが、エンパワメントであると考えている。

2014 年現在、「若者へのアプローチ」と「社会へのアプローチ」の 2 つの柱をたてて活動している。

若者へのアプローチでは、「もうひとつの放課後探しプロジェクト」を主な活動としている。中高生のやりたいことを企画にし、大学生と一緒に実現しようとするプロセスの中で、意見を表現することの重要性や自己肯定感を高め、社会参画へと繋げる活動を行なっている。

社会へのアプローチでは、若者の社会参画の重要性を社会に認知させるため、各地での講演会の開催や様々な取り組みの発信を行い、若者を育む社会の形成を目指している。

© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Ⅳ 街頭アンケート

1 アンケート調査の概要

1.1 調査目的

YEC の社会へのアプローチを達成する足掛かりとするために、自分や自分を取り巻く社会について、現在の日本の若者の考え方とスウェーデンの若者の考え方を知り、スウェーデン、日本それぞれの現状及び示唆を明らかにすることを目的として実施する。

1.2 調査対象

静岡の市街地を通った通行人、および、ストックホルムの市街地を通った通行人それぞれ 100 人前後を調査対象とする。

1.3 調査方法

通行人に声をかけ、大学生が調査をしていて、アンケートに協力してほしいという旨を伝え、アンケート用紙に回答を記入してもらう。どのアンケートも一日で行なった。

1.4 調査内容

次頁より各問いかけの結果を提示していくため、ここでは省略する。

1.5 回答数

10 代と 20 代以上に分けてアンケートを集計した。回答数は次のとおりである。

	静岡	ストックホルム
10 代	116	84
20 代以上	50	50
合計	166	134

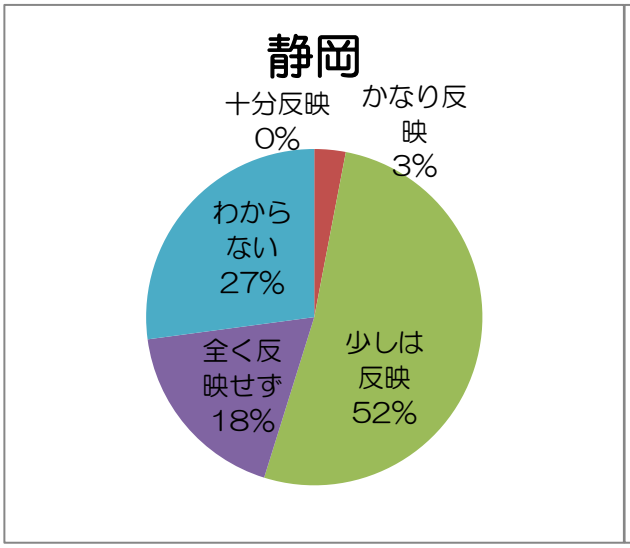
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

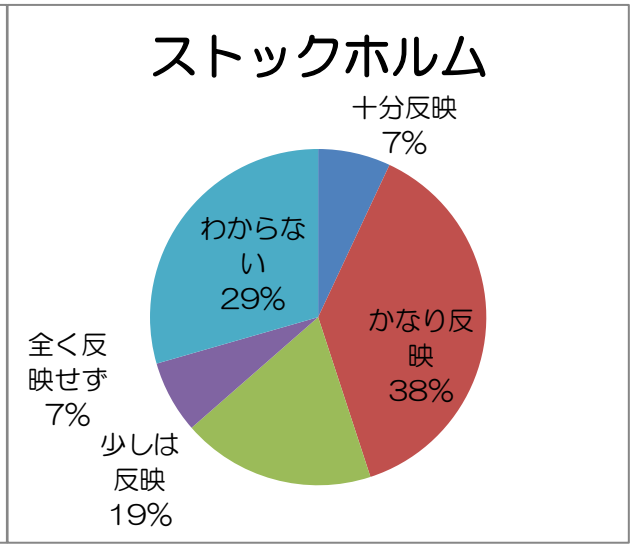
2 アンケート集計結果

Q1. 私たち一般国民の意見や希望は，国の政治にどの程度反映していると思いますか。

静岡	十分反映している	かなり反映している	少しは反映している	全く反映していない	わからない
全体	0	5	86	30	45
20 歳以上	0	1	31	16	2
10 代	0	4	55	14	43

ストックホルム	十分反映している	かなり反映している	少しは反映している	全く反映していない	わからない
全体	9	49	24	9	38
20 歳以上	2	22	14	3	8
10 代	7	27	10	6	30



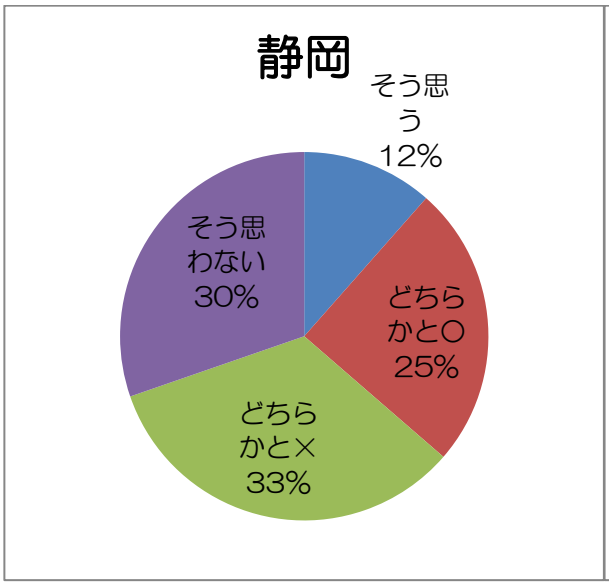


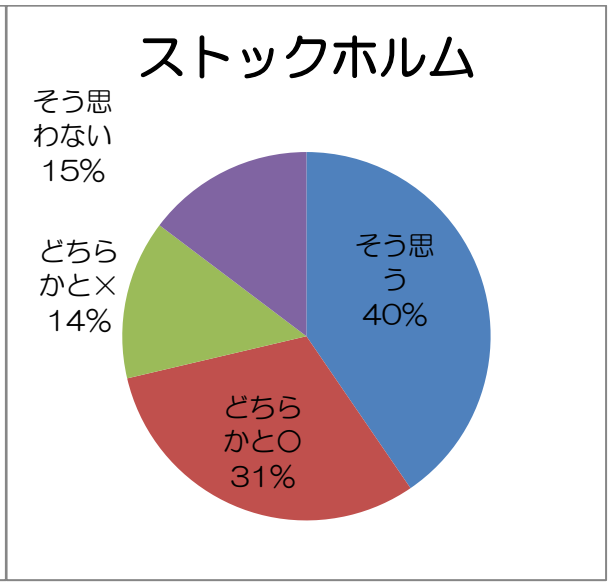
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q2. 社会は自分の力で変えられると思いますか。

静岡	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全体	19	41	55	50
20 歳以上	5	12	21	12
10 代	14	29	34	38

ストックホルム	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全体	55	42	19	20
20 歳以上	19	18	4	9
10 代	36	24	15	11



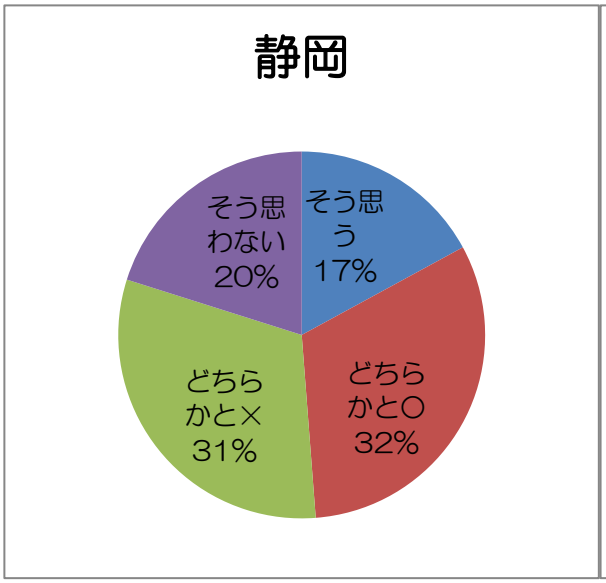


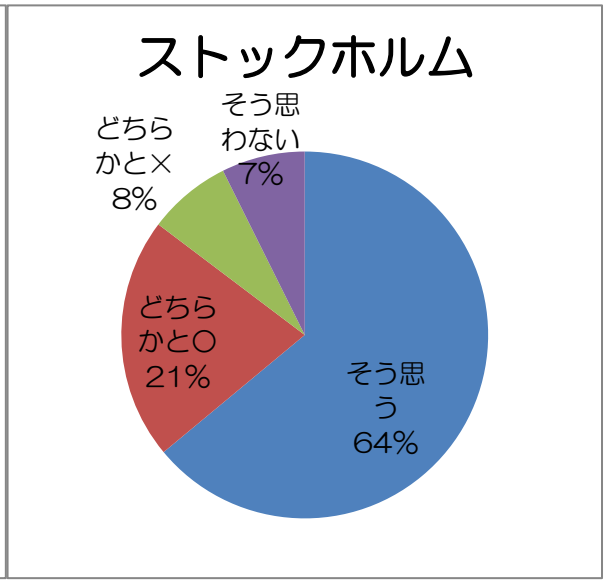
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q3. あなたは自分の事が価値のある人間だと思いますか。

静岡	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全体	28	52	51	33
20 歳以上	8	17	16	8
10 代	20	35	35	25

ストックホルム	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全体	87	29	10	10
20 歳以上	41	5	2	2
10 代	46	24	8	8



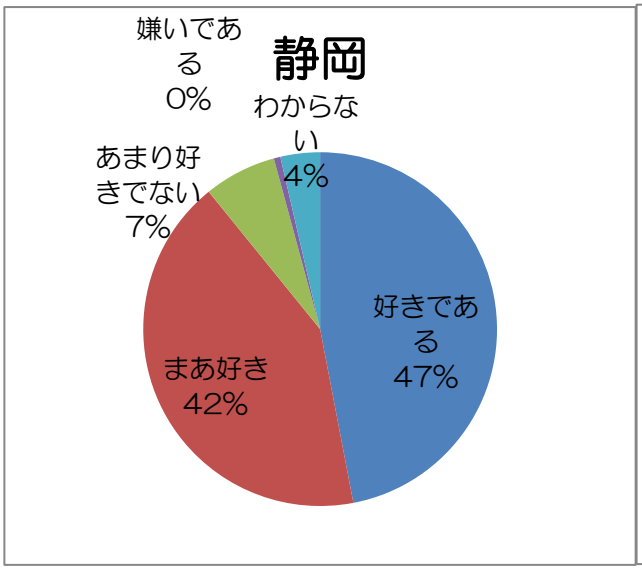


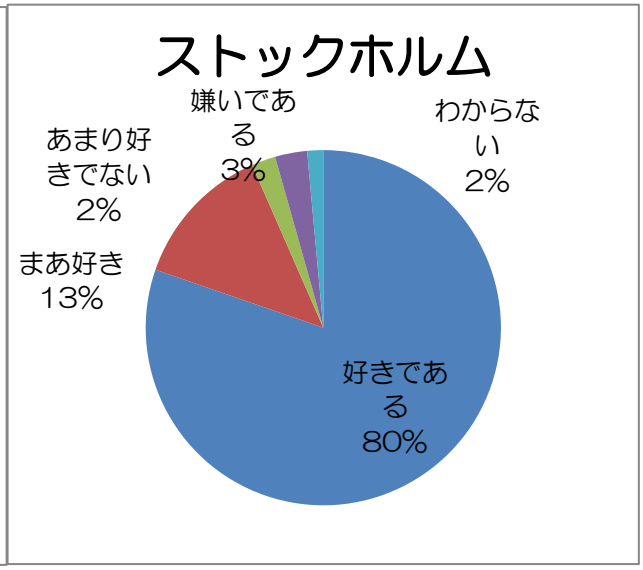
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q4. あなたは、あなたの今住んでいる地域（市町村）が好きですか。

静岡	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	嫌いである	わからない
全体	78	70	11	1	6
20 歳以上	23	21	4	0	2
10 代	55	49	7	1	4

ストックホルム	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	嫌いである	わからない
全体	110	18	3	4	2
20 歳以上	42	6	1	0	1
10 代	68	12	2	4	1



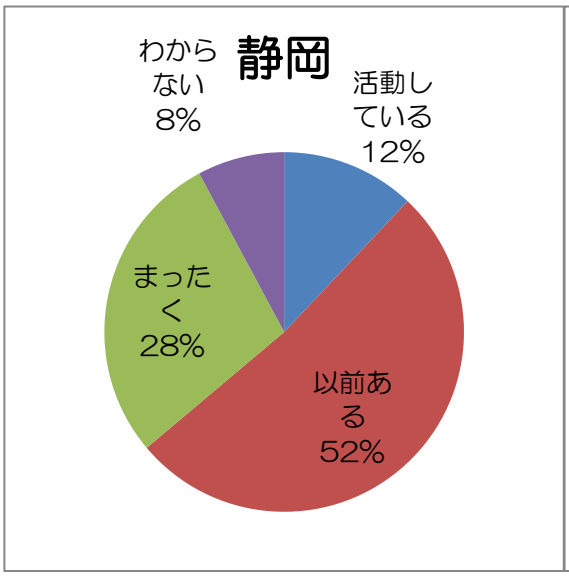


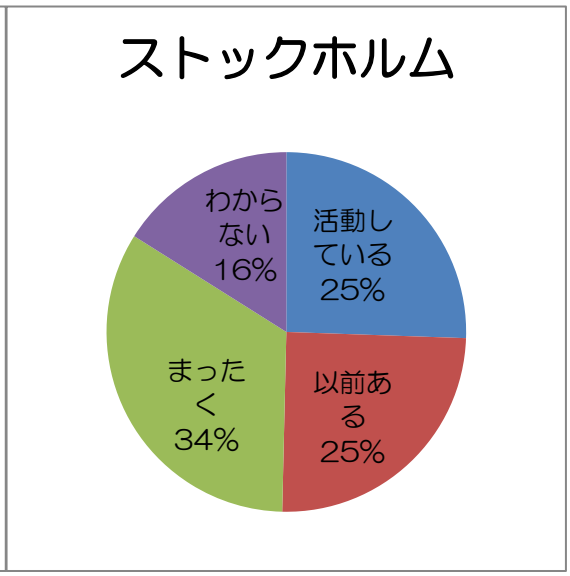
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q5. あなたは現在、学校外で自発的に「ボランティア活動」をしていますか。

静岡	活動している	以前ある	まったくない	わからない
全体	20	86	47	13
20 歳以上	9	21	17	3
10 代	11	65	30	10

ストックホルム	活動している	以前ある	まったくない	わからない
全体	35	34	46	22
20 歳以上	16	19	12	3
10 代	19	15	34	19



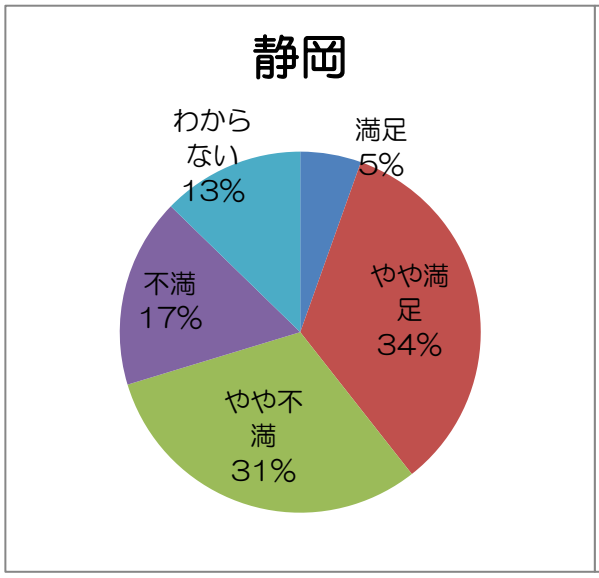


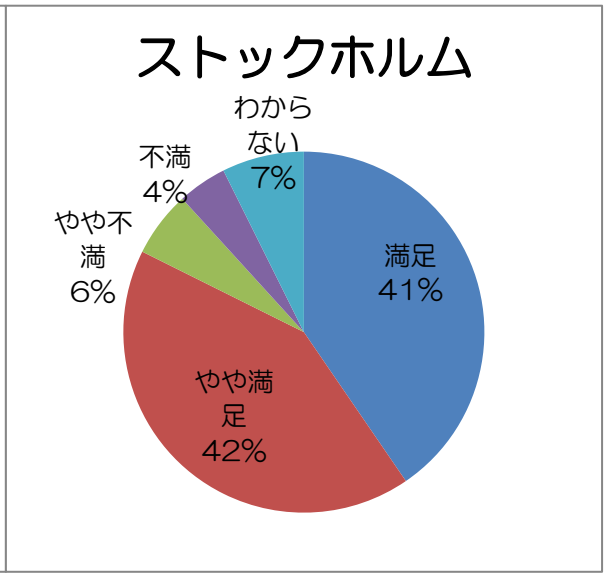
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q6. あなたは、自国の社会に満足していますか。それとも不満ですか。

静岡	満足	やや満足	やや不満	不満	わからない
全体	9	56	51	28	21
20 歳以上	4	17	17	10	1
10 代	5	39	34	18	20

ストックホルム	満足	やや満足	やや不満	不満	わからない
全体	55	57	8	6	10
20 歳以上	21	23	1	2	3
10 代	34	34	7	4	7



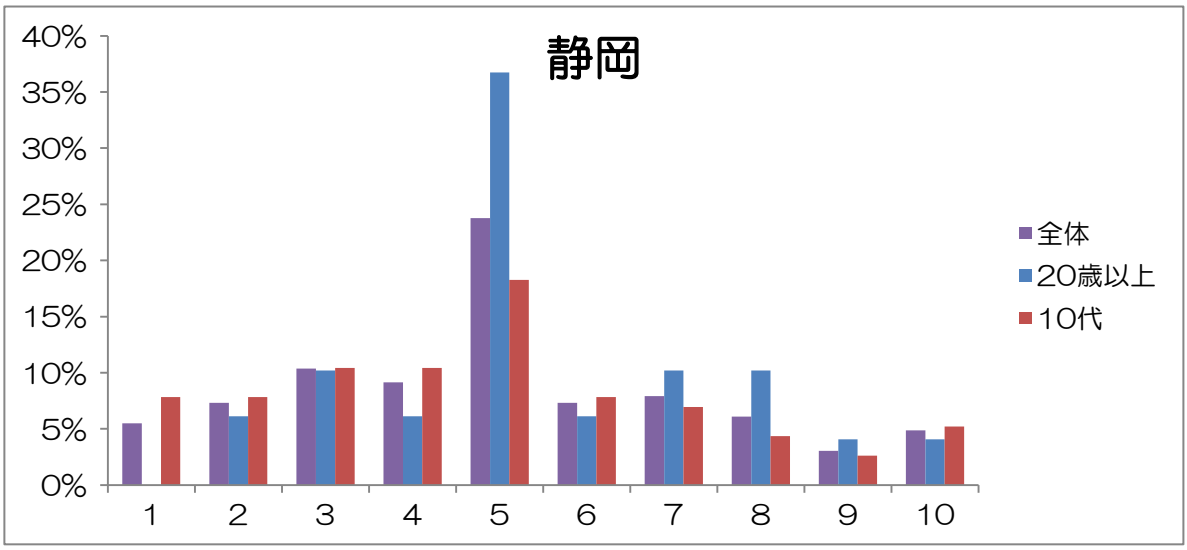


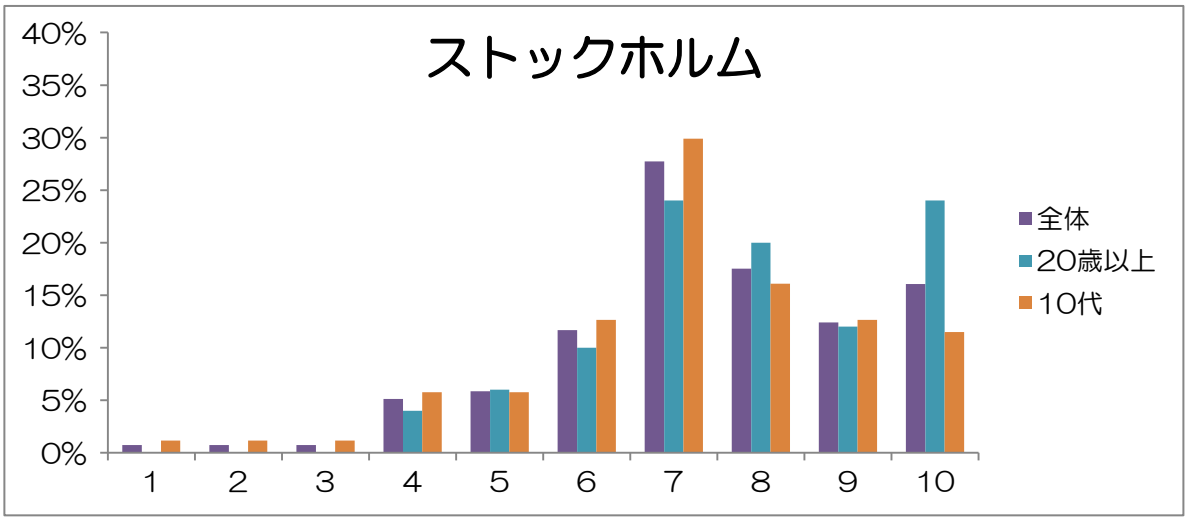
© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q7. 自分自身の人生に対してどれほど自分の思う通りになると思いますか。(10 段階)

静岡	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない
全体	9	12	17	15	39	12	13	10	5	8	24
20 歳以上	0	3	5	3	18	3	5	5	2	2	3
10 代	9	9	12	12	21	9	8	5	3	6	21

ストックホルム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない
全体	1	1	1	7	8	16	38	24	17	22	2
20 歳以上	0	0	0	2	3	5	12	10	6	12	0
10 代	1	1	1	5	5	11	26	14	11	10	2

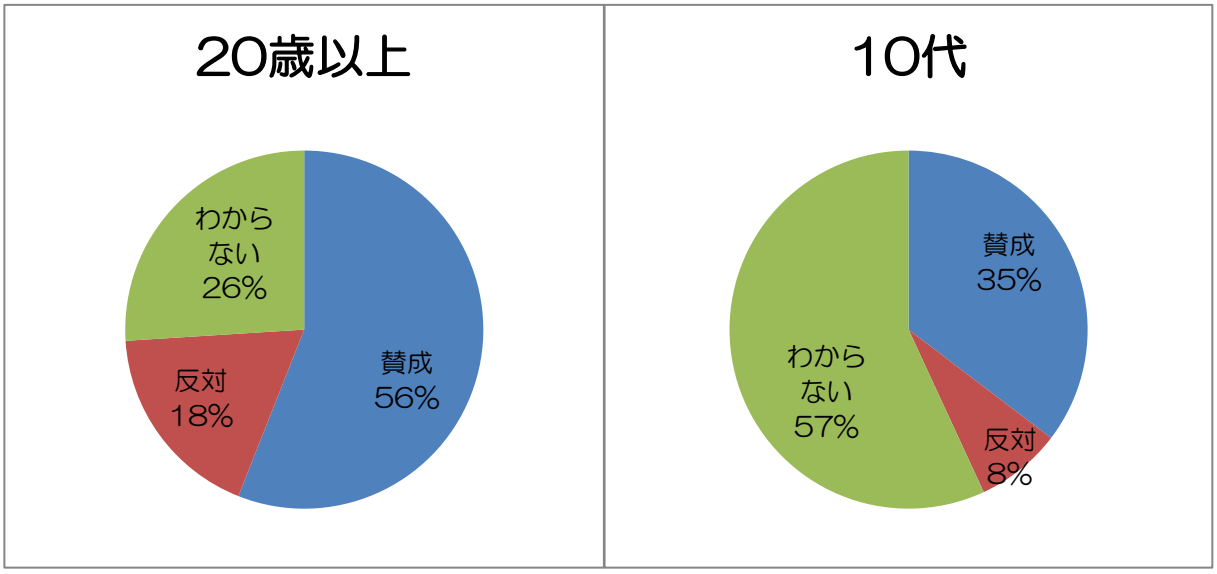




© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q8.1. 国民投票法案が可決されると 18 歳以上の方が国民投票を行うことができます。あなたは国民投票法改正案に賛成ですか、反対ですか。(静岡のみ)

静岡	賛成	反対	わからない
全体	69	18	79
20 歳以上	28	9	13
10 代	41	9	66



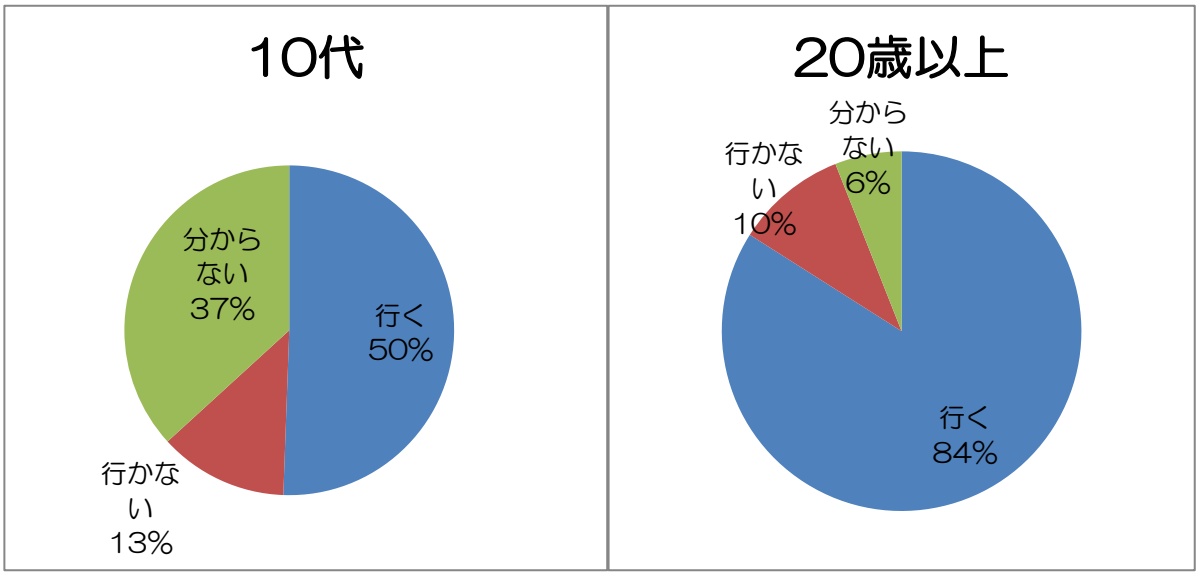
Q8.2. なぜそう思われますか。(一部抜粋・原文ままで・静岡のみ)

17 歳	賛成	18 歳くらいになれば自分の意思があって、投票してよいと思う
17 歳	わからない	いまいち最近の人は政治についての理解がないため。 いきなり投票とか言われても困る
17 歳	反対	まずは 20 歳以上の人が投票すべき！
16 歳	賛成	国民の声をもっと充実させたい
13 歳	反対	もっとしっかりとした国をつくってほしい
61 歳	反対	現在のような 18 歳の若人がそれだけの自覚をもっているとは思われない為
45 歳	賛成	早い時期から意見を示せる場があると意識が変わると思うから
40 歳	反対	ちゃんとした説明・教育があれば OK と思う
31 歳	賛成	18 歳という年齢はすでに、物事に対して価値観及び考えを持っている年である。より多くの若い人が社会に意識することで、他の世代にも刺激になるから

© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

Q9. スウェーデンの選挙が 9 月 14 日にあります。あなたが投票権を持っているとしたら、選挙に行きますか。（ストックホルムのみ）

ストックホルム	行く	行かない	分からない
全体	86	16	35
20 歳以上	42	5	3
10 代	44	11	32



３アンケート結果からの考察

今回の調査では、静岡（日本）とストックホルム（スウェーデン）の若者で、大きな違いがみられる点が多かった。特に「2.社会は自分の力で変えられると思いますか。」という問いでは大きな違いが出ており、スウェーデンの若者の自己肯定感の高さ、また、日本の若者の自分に対する自信のなさなどが、表れていることがわかる。

また、特徴的であったのは、「4.あなたは、自分の住んでいる地域（市町村）が好きですか。」という地域に焦点を当てた質問である。「好きである」「まあ好きである」の肯定的な回答の割合は、日本、スウェーデンともに約９割と同じくらいの割合であった。「6.あなたは、自国の社会に満足していますか。それとも不満ですか。」という国レベルの問いでは、スウェーデンの若者の回答は「満足」「やや満足」の肯定的な回答の割合は約８割であり、４の問いと比較し、それほど違いはなかった。しかし、６の問いの、日本の肯定的な回答の割合は約４割で、不満の割合も大きく、ネガティブな回答が多かった。

このことから、「地域」に対する問いと、「自国」に対する問いで二国間の違いが出たのは、２の問いの結果からもわかるように、スウェーデンの若者たちは自国を身近な存在だと感じ、社会に参加・参画しているという意識が根付いているということが考えられる。一方、日本では自国を遠い存在だと感じており、「8. 国民投票法案が可決されると 18 歳以上の方が国民投票を行うことができます。あなたは国民投票法改正案に賛成ですか、反対ですか。」という問いで、全体の約５割が、わからないと答えていることなどからも、自分の暮している身近な地域のことには関心があるが、国レベルになると、自分のどこか知らないところで動いているもの、という感覚を持っていて、結果として、自分には何もできないという無力さなどが、国への満足度が低い要因のひとつになったと考えられる。

この調査結果は見る人によって、考え方はそれぞれだと思うが、日本とスウェーデンの若者の意識の違いは明らかである。この違いは何から生まれているのか、その意識の違いが社会にどんな影響を与えているのか。そのようなことを考えながら、スウェーデン視察報告を読んでいただけると幸いである。

Ⅴ 訪問施設紹介

1 直接民主党 “Direktdemokraterna”

日時　　2014 年６月８日
場所　　ストックホルム市内
先方　　ペルさん（高校生に哲学・数学・美学を教える教師でありながら、政党の立ち上げをした）
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大
報告者　土肥潤也

1.1 概要

「直接民主党」は、インターネットを活用し、間接民主制と直接民主制を補完することで、市民の直接的な政治運営、「直接間接並存政治」を実現した政党である。インターネット上の「直接民主党」のウェブサイトに登録した会員たちが特定の争点について議論した後、評決で立場を決め、直接民主党の議員はその結果に忠実に従う。

以前は、デモエックス(“Demoex”)としてバレントゥーナ市の政党として活動をしていたが、現在は、「直接民主党」（”Direktdemokratena”）として国政で議席をとることを目指している。

デモエックスの始まりは、2000 年にペルさんが働いていたバレントゥーナ市の高校で行われた、生徒たちがインターネット技術と民主主義について学ぶ「スタディデイ」という日がきっかけだった。その日に、インターネットを用いて行った「リトゥン・ディベート（書かれた議論）」は「オーラル・ディベート（口頭での議論）」の政治活動よりも優れていると考え、政党を立ち上げるに至った。

1.2 デモエックス創設までの経緯

前述したように、デモエックスが創設されるきっかけになったスタディデイは、「なぜ高校生は政治に関心が低いのか」ということを知ることを目的に、市が学校に提案し、自治体や学校などが出資をして実現したものだった。政治家や市の職員なども授業の見学に来ていた。

前半は、生徒たちをパソコンの前に座らせ、モデレーターと呼ばれる進行役の人が生徒たちに「街（バレントゥーナ）を改善するためにあなたは何をしたいか」という問いかけをし、それを自由にネットに書き込むというものであった。生徒たちは匿名であるため、自由に意見を書き込み、「交通状況をよくしたい」「学生が住めるアパートを作りたい」「街に若者の居場所をつくりたい」など、様々な提案をした。それらの提案から 20 個をピックアップし、ランキングをつくり、順位の高いものから議論をした。今回最も高い順位にきたのは、「ユースセンターを作りたい」というものだった。その後、ユースセンターを作るという結論に生徒たちが至るまでにかかった時間は、たったの 15 分であった。

それを見ていた政治家は生徒たちの作業を中断させ、「こんなにも短時間のうちに、君たちは素晴らしい意見が言えるじゃないか。それならば、私たちの政党に入り、一緒に活動をしないか」と生徒に語りかけた。すると、生徒たちの中の一人が「政治はあまり面白いものではない」と言った。

また、ある生徒は「政治では私たちは影響力を持つことができないと思う」と答えた。しかし、政治家はそれに対し、「政治は面白いし、影響力だって持つことができる」と切り返した。そんなやり取りを何回かした後に、結局、生徒たちは、「政治に参加してもいいけれど、私たちは他にもやることがたくさんあって忙しいのです。したがって、優先順位を高く持つことはできません」と言い、政治家も納得して、ディスカッションは終わってしまった。

後日、スタディデイに参加した生徒たちに会って感想を聞いてみると、前半のコンピュータを使ったセッションはとても面白かったが、後半の政治家とのディスカッションはとてもつまらなかったと言っていた。その話を聞いて、ペル氏は、前半と後半のセッションの違いはいったいなんなのだろうかと考えた。

要するに、前半は政治について書くリトゥン・ディベートで、後半は政治について話すオーラル・ディベートであったのだ。オーラル・ディベートは、一人が話していたらその話を聞いていなければいけないし、時間がかかる。それに対して、リトゥン・ディベートは、ひとつのテーマから様々なトピックに派生させることができるので、多様な議論ができる。それに加えて、匿名であることから、質問もしやすい。また、議論の流れも可視化できるため、時間の短縮にもなる。そこで、ペル氏は、こんなにもリトゥン・ディベートのほうが優れていることが明らかなのに、なぜ従来の政治活動はすべてオーラル・ディベートなのかということに疑問を持った。

そしてペル氏は、生徒たちに、「もし、私がインターネットを用いて特定のテーマについて議論をし、その結果を政治に反映させるような政党をつくったら支持をしてくれるか」と聞くと、生徒たちは支持すると言った。それから、バレントゥーナは人口 3 万程度の街であることからも考え、インターネットを使った政党は可能だという結論になり、「直接民主党」の先駆けであるデモエックスが、2002 年に誕生した。

デモエックスとしては、2003 年に 19 歳の女子学生が出馬をし、当選を果たした。

1.3 政治の透明性と民主主義

この政党の考え方は、「トロイの木馬」に似ているところがあり、誰もが木馬に入ることができるのと同じように、誰でも匿名で政治に関わることができる。トロイの木馬の方法は、ある種のデモクラティックウイルスである。いろいろな方法で民主主義を発展させることは可能だが、まず透明性を高めることが重要である。政治の透明性が高ければ、政治家は特定のテーマに関してどのように考えているのかを示さなければいけない。もし、透明性が低ければそのような事をする必要はなくなる。さらに、政策の中身について深く議論をすることや、それらに優先順位をつけて、スピード感を持って対応していくには、透明性が保たれなければならない。

この文脈でいう「透明性」とは、政治家がどのような意思決定をしたのか、なぜその意思決定を下したのか、費用の内訳はどうなっているかなどが可視化できることだ。そうすることで、市民は監視をすることができる。ヒエラルヒーでは、すべての情報を上から下へと流していくことは難しい。その意思決定に関して、政治家と市民との双方向のコミュニケーションがあることが透明性なのだ。

例えば、次のワールドカップはカタールで行われる。FIFA のフラッターという会長がいるが、彼は会長に選出される際の選挙でカタールから多くのお金をもらい、会長に再選された。そして、カ

タールがワールドカップの会場に選ばれた際にも多くのお金をカタールから受けている。このように、政治には腐敗と汚職がつきものである。

ウィキリークス[2]が行っているように透明性を高めることをしなければいけないが、それをしなければ世論は操作されてしまう。民主主義の基本的な価値観として、男女限らず同じ価値がある。また、人には平等の権利があり、その権利の一つが情報に対する権利である。私たちは、身分もバックグラウンドも全く異なるが、一人一票という平等の権利を有している。

1.4 質疑応答

Q1. どのくらいの若者がこの政党を支持しているのか。政党に所属することは可能か。

A1. 若者としては、当初、12 人くらいの生徒が支持をしてくれた。政党のメンバーとして所属することも可能で、実際にメンバーになったが、彼らは当時 18 歳未満であったので、投票には参加できなかった。

Q2. デモエックスの名前の由来はなにか。

A2. “A Democracy Experiment（民主主義の実験）”の略称であった。デモエックスが、展示品のようにしっかりと機能するかどうかというデモンストレーションの意味も込められている。

Q3. ペル氏は直接民主党の代表なのか。

A3. デモエックスの時は代表であったが、直接民主党では非公式な代表である。というのも、私は権力が欲しいわけではないし、民主主義の発展に興味があるだけだ。

[2] ウィキリークス：匿名で投稿された内部告発情報をインターネット上で公開するウェブサイト。非営利のメディア組織によって運営されている。

2 FITTJA(フィッチャ) ユースハウス “Ungdomens Hus”

日時　2014 年６月９日
場所　Värdshusvägen 6, 145 51 Norsborg
先方　イルマスさん、ウッラさん
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　鈴木貫司

2.1 施設概要

１９９８年秋、若者の意見を吸い上げるための施設を建てようという意見が、若者自身から挙がった。そして、若者自身が施設の設計から実際の施設内でのアクティビティなどの内容まで決めることに携わった。そして、２００１年５月若者のためのユースハウスがオープンした。ユースハウスの主な目的は、大人がサポートし、若者の個性を融合した若者文化を築くことである。すべての活動は質と民主主義を考えて特徴づけられている。ユースハウスではすべての若者が意見を聞いてもらえる機会があり、創造性と楽観主義が触発される場所になっている。

このユースハウスのある Fittja（フィッチャ）は、ボートシルガ市の一部である。人口は 7458 人で、そのうち 64.7%はスウェーデン人以外の民族である。また、そのうち 25.1%は移民である。ポーランド、ウクライナ、トルコ、ロシア、ルーマニアの出身が多い。

2.1.1 施設について

スタッフは、フルタイムで働いている人が８人、パートタイムが３人である。この施設の施設長は、話を伺ったイルマスさんとウッラさんである。

開館時間は、日曜日～木曜日が 17～22 時、金曜日～土曜日は 17～24 時である。一年中開館しているが、唯一クリスマスだけは開館しない。スウェーデンではクリスマスを家族と過ごす習慣があるためだ。

対象としているのは、15 歳～22 歳の若者である。

2.1.2 設備

次のような設備がある。

・カフェ：小さな店が中にある。健康週間という、秋に今までの健康を祝い、健康に関するレクチャーなどをする行事を行なっている。

・コンピュータルーム：仕事を探している人と、放課後に使う学生に向けて解放されている。

・ボクシングマット：キックボクシングのためのマットがある。現在は女の子が教わっている。

・シアター：映画を上映する。しかしながら、アクションやホラーなど、恐怖を植え付けるものや、暴力的な映画は、子どもに悪影響があると考え、上映しない。

・トレーニング室：ウエイトリフティングのための部屋。

・ガールズルーム：女の子しか入れない部屋がある。ソーイングセットやビーズなどが置いてあり、女の子の遊びを教えあう。また、この部屋で学んだ遊びを、地域の女の子に教えることで、彼女たちは先生になっている。

2.2 活動内容

2.2.1 テーマナイト

毎週火曜に行われる。センターに来る若者の興味があるテーマについてディスカッションをする。若者がスタッフと一緒に話ができるようなテーマを選ぶ。様々な人に来てもらい、若者と多様なテーマについてディスカッションをしたり、来てもらった人にレクチャーをしたりしてもらう。

例えば、企業の採用担当を招き、「雇われるためになにをしたらいいか」ということを教えてもらう。その時に挙げられたのは、言語の問題や、知識の問題、技能などであった。このようなプロセスを経て、若者はそれについて考えることができ、就職するために何をすべきかが分かる。

2.2.2 若者映画制作

2011 年に始まったプロジェクトで、映画の制作と主体的に活動する楽しさを提供する教育活動である。すべて無料で、機器の操作、演劇の仕方、脚本の書き方、音響・照明・編集を学ぶことができる。

2.2.3 その他のプロジェクト

定期的に、ユースハウスを基準にしたプロジェクトをしている。ずっと継続していくプロジェクトもあれば、短期間で終了するプロジェクトも存在する。

2.3 質疑応答

Q1. どんな利用者が多いか

A1. 子どもたちに「あなたはどこの国の出身ですか」という質問は、スウェーデンの民主主義に適していないから、わざわざ聞くことはしない。もちろん、この質問についてのデータはあるが、人種で区別はしていない。全体的に男の子が多く、下のフロアは 6～7 割は女の子が多い。

Q2. なぜ移民の利用者が多いのか

A2. そもそもスウェーデン人が住んでいる地域ではなかった。ここはストックホルムからも離れていて、スウェーデン人は市街地の方に家を買い、お金がない移民は郊外に住むというのも理由の１つだが、スウェーデンに移り住んでいる知人を訪ねて移住をしてくるため、この地域は移民が多くなる。そのため、来訪者のほとんどがスウェーデン以外にルーツを持つ若者である。スウェーデンにはロシア人、ウクライナ人など、たくさんの移民が住んでいる。移民同士は固まる傾向にあるため、この辺には移民が多く住んでいるのだ。この地域はとくに犯罪が多い地域のため、スウェーデン人はこの地域のことをあまり良いところとは思っていない。

Q3. 若者たちがここに来る目的はなにか

A3. 友達がたくさんいるというのもあるが、この周りで遊びにくるところがここしかないというのが主な理由ではないか。彼らはすごくこの場所が好きである。というのは、この場所が彼らにとっての第二の家であり、ここでやりたいことをなんでもできるからだ。私たちは若者たちが好きなことをすることを助けている。学校に行っていない若者についても、教育を受けていなければ仕事に就くことも難しいため、このユースハウスにくる。

Q4. 運営委員会はあるのか

A4. この施設の理事会があって、ここの管理をしている。第一月曜日に「若者会議」としてミーティングをしている。男女５人ずつがメンバーである。この理事会に関わりたい人がいれば、誰でも加わることは可能である。また、テーマデイで呼びたい人を決めるのも理事会の仕事である。

Q5. なぜテーマデイで政治家や会社の人がくるのか

A5. 理事会で、この人を呼びたいという話をあげ、彼ら自身が直接会社や政治家にコンタクトをとり、招待をしている。私たちは若者たちの会議での決定を尊重する。なぜなら、それこそが民主主義であるから。

Q6. テーマデイには、連絡を取った大人たちは、みんな来てくれるのか

A6. 大概、来てくれる。ガールズデイという女の子限定の日があり、それには IKEA[3]が協力してくれていて、ガールズデイに使うすべてのお金を IKEA が負担してくれている。

---

[3] IKEA：スウェーデン発祥の世界最大の家具販売店

なぜ IKEA はお金を出してくれるのか、詳しくはよくわかっていないが、おそらく IKEA も若者を助けたいと思っており、IKEA がこの地域と近いというのもあって、フリースヒューセット[4]が IKEA に「ここを助けてください」とお願いしたのではないか。フリースヒューセットが IKEA にこのユースセンターを勧めてくれて IKEA と繋がることができた。

Q8. この地域の「仕事と教育の問題」とはなにか
A8. 学校が終わった後の放課後にすることがない（仕事ができない）こと。名前による人種差別が起きている。例えば、就職の面接のために電話をした時、「イルマス」というスウェーデン人の名前でないだけで、話すらしようとしないという問題がある。

Q9. 若者の運営委員会は、どのように利用者のニーズを収集しているのか
A9. 運営委員会の人たちは、この辺に住んでおり、彼らはここに来る若者みんなと友達で、一緒の学校に行ったりしているから、意見を収集できる。運営委員会のうちの若者２人が実際にここで一緒に働いている。

Q10. ここが始まった理由は
A10. この地域は犯罪が多かった。その理由は、若者がやりたいことをやることができていないから。どうにかして政府が解決しようと思ったので、５つの課題（言語・仕事・民主主義など）の解決のために、この施設と仕組みを作り上げた。
その時の新しい若者たちは、フリースヒューセットの活動に魅力を感じていて、小さなフリースヒューセットを作りたいと思っていた。50 人の若者たちと一緒に取り組みを始めて、その時、イルマスさんは若者向けの ungdomenscafe（ユースカフェ）を自分自身で経営していた。１５歳から２５歳の人を対象にしたカフェだったため、１５歳未満の人は来られなかった。それからしばらくして、０歳から１５歳を対象にした施設を作ったのだった。年齢層を分けたのは、２２歳までの若者が同時に来ると、上の世代が下の世代に悪い影響を及ぼす可能性があるから、１５歳で分けた。

Q11. 若者と関わる上で一番大切にしていることはなにか
A11.それを英語で語るのはすごく難しい。ただ私は若者が好きで、長年やっている。最も意識していることは、若者と関わるのにベストを尽くすことである。それだけで、私は幸せになれる。

[4] フリースヒューセット：スウェーデン最大のユースセンター。詳しくは後述する。

3 Musikhuset (ミュージックヒューセット)

日時　　2014 年 6 月 9 日
場所　　Tomtbergav. 370, 145 71 Norsborg
先方　　デイビッドさん
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　水島滉大

3.1 概要

ミュージックヒューセットは、子どもたちに対し、音楽をメインとした余暇活動を提供する施設である。時間帯によって対象年齢が分かれており、13 時 30 分から 16 時までは 10～12 歳の子どもを対象としていて、16 時以降は 13 歳～18 歳の子どもを対象としている。この施設は、小学校と隣接している。スウェーデンの小学校はだいたい 13 時過ぎに授業が終わるため、小学校と隣接しているこの施設で、放課後を過ごす生徒が多い。16 時になると、12 歳以下の子どもたちは家に帰らせて、13 歳以上の子どもの時間になる。18 歳より上の年齢の利用者が対象に入っていないのは、18 歳を過ぎた若者は、この施設にいるよりも働いたり勉強をしたりすべきだと考えているからだ。

この施設の目的は、子どもたちがここに来ることによって、様々な犯罪に手を染めないようにすることである。若者がやりたいことをすることができている状態を作ることで、実際に犯罪率が低くなった。また、「将来にどのようなことをしたいかを考えるきっかけになってほしい」という願いも込められている。運営費は、他のユースセンターほどではないが、市から予算が出ているので、それを用いることで運営している。

もともとここは、成人も含めた音楽のための活動施設であった。今とは利用者層が異なり、十数年前は 15 歳以上しか来ていなかった。数年前に、国と自治体の方針転換により、若者のための活動施設になった。対象年齢が変わったので、少し前までは入口でたばこを吸うことができたが、今は禁煙にしている。

3.2 施設について

3.2.1 スタッフ

職員は、合計 10 人程度働いている。そのうち 7 人がパートタイム[5]で働いており、3 人がフルタイムで働いている。13 時から 18 時までは 2 人の職員、18 時からは別の 2 人の職員が交代をして働いている。

フルタイムの 3 人は、常に現場にいるユースワーカー、掃除担当、そして、この施設の最高責任者である。最高責任者は、子どもとは直接かかわらずに、行政的な手続きや会議を行っている。

各職員には、それぞれに役割がある。ある人は、施設を利用する若者の間違った行動・行為をしかる役割を持っていたり、ある人は若者を励ます役割を持っていたりする。若者との関わり方は、2 週間に 1 回ミーティングを設けて、どのようなルールを制定するのが若者たちにとって良いのか話し合っている。

3.2.2 子どもたちの活動

この施設には、女の子専用の部屋が設けられていて、当インタビューはその部屋で行われた。この部屋には、以下のようなルールが制定されていた。

- ごみを捨てない
- 侮辱をしてはいけない
- 互いに尊重し合う
- お菓子を持ってかえってはいけない
- 誰かが話しているときは、その人の話を聞く
- 携帯禁止

利用者はこのルールを守らなければならず、ルールを破って警告を受けると、ペナルティがある。定期的に水泳大会やバーベキュー、ゴーカートなどのイベントをするが、ペナルティを課せられていると、次回のイベントには参加することができなくなる。

このようなルールを作成する際、子どもたちは「なぜこの部屋を作ったのか」という問いのもとで話し合っていた。もし受け入れがたいルールがあったならば、なにが問題なのかを全員で話し合い、すべての人にとって有益となることとはなにかについて話した。賛成・反対でにらみ合って排斥をするのではなく、異なった考えから学ぼうとする姿勢はとても重要である。

子どもたちはそれぞれ、イベントなどを企画するために、グループごとにお金を持っている。単にお金を与えるのではなく、企画を実行するための資金を提供して、やりくりさせることを目的としている。学校でうまく勉強できない子どもたちを助けるグループや、清掃活動を通じてお金を得ようとするグループまで存在している。「彼らの考えていることはすべて、不可能ではないのだ」

---

[5] スウェーデンでの働き方は、日本のような正規雇用・非正規雇用といった雇用形態とは異なり、フルタイムとパートタイムという形態に分かれている。公務員も例外でなく、公務員であるがパートタイムで働くという雇用形態も可能だ。

という考え方を通して、子どもたちがやりたいと言ったことをすべてサポートする。一人ではできそうもないことも可能にする。

3.3 質疑応答

Q1. これは学校の一部なのか

A1. 学校ではないが、連携をしている。例として、体育館の道具を借りている。隣接している小学校は、400 人～500 人の小学生が通うインターナショナルスクールで、英語をはじめ、様々な分野を勉強している。

以前は、休み時間にセンターに遊びに来ることもあったが、現在の運営時間は 13 時 30 分から 16 時までなので、休み時間よりは放課後に子どもたちが来る。連携については、例えば、学校の人手が足りないときは、ここで働くユースワーカーが学校で数学やスウェーデン語などを生徒に教えている。

Q2. 職員は皆、ユースワーカーの資格を持っているのか

A2. 持っていないが、必ずしも資格を要求されるわけではない。しかしながら、新しく雇用する人はその資格が必要になった。ユースワーカーの資格を持っていない者は、今後研修に行くように言われている。

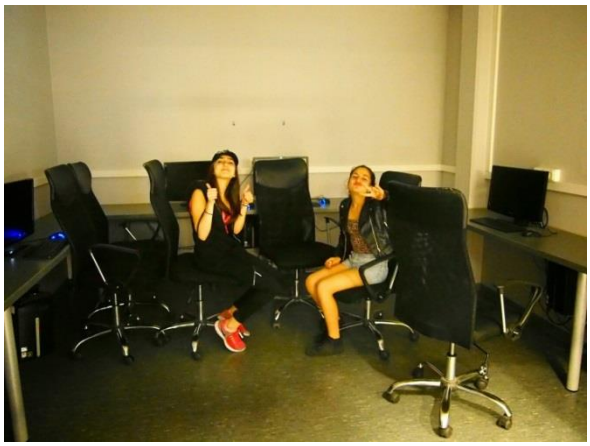
Q3. バーベキューやビーチに行くといった活動は、誰が決めるのか

A3. 決めることには、できるだけ子どもたちにも参加してもらおうとしている。しかしながら、すぐに「できるよ」というわけではなく、計画を一緒に練ってから、施設長に聞き、施設長が聞き入れたら、その施設長の責任で行うことができる。

Q4. なぜそこまでして若者の決定を重要視するのか

A4. ここは、子どもたちのための施設だから、彼ら自身のやりたいことをするべきで、大人たちが決めたことのために時間やお金を使うことは正しくない。

若者たちは常に何かをしたいと思っている。私たちはただ若者たちのやりたいことを満たすため、そして危険から若者たちを遠ざけるためにいるのだ。つまり、私たちユースワーカーは、念のために居るだけなのである。



© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

4 Fryshuset（フリースヒューセット）

日時　2014 年 6 月 10 日
場所　Mårtensdalsgatan 2-8, 120 30 Stockholm
先方　ロバートさん、パニーラさん
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　水島滉大

4.1 施設概要

フリースヒューセットは、学校とユースセンターの両方の機能を兼ね備えた施設であり、1984 年に設立された。約 600 人がここで働いており、利用者は年間でバスケットだけで 1 万人以上、スケートボードも 3 千人以上が利用している。

代表のアンダース・カールバーグは、1968 年の学生運動の闘士であった。設立当初の本業は建設業で、YMCA4 というバスケットボールチームのコーチをしていた。当時使われていなかった冷凍倉庫を使用して活動を始めたことが、この組織の由来にあたる（FRYSHUSET はスウェーデン語で冷凍室という意味）。当時のスウェーデンの学校や社会では、生徒の知識だけを育むことだけに専念しており、若者や生徒の好奇心を育むことをあまり重視していなかった。またユースクラブ（部活動のようなもの）がない中等学校のために、「従来の学校よりももっと魅力的な学校にしよう」ということで、スポーツや音楽等の余暇活動を組み込んだ学校を設立した。

その後、1986 年夏にストックホルムで巻き起こった移民による暴動をきっかけにして若者の声を聞き、問題解決アプローチをするソーシャルプロジェクトが生まれた。スウェーデン政府は、この問題に介入し、この状況の改善をフリースヒューセットに依頼した。その依頼を受託し、活動を通じて明らかとなったのは、ほとんどの若者が暴力を遺憾に感じていることだ。そして、それを打ち消す方法やどうやってよりよい将来を築いていくかの多くのアイデアを若者が持っていた。その事件をきっかけに、フリースヒューセットは学校・余暇活動だけでなく、若者の生きている社会の中にある課題解決の活動を行う様になっていった。フリースヒューセットが大きくなっていったのは、ただ社会に必要とされていたからなのだ。

4.2 活動について

4.2.1 教育

フリースヒューセットでは、３つの学校を運営している。

Ⅰ 中学校

13 歳から 15 歳を対象としており、およそ 150 人が通っている。「パッショネート・インタレスト（情熱的な興味）」という教科があり、バスケットボールやスケートボード、音楽活動など、生徒たちの興味からやりたいことを自由に決めるのが、この教科の特徴である。詳しくは後述する。

Ⅱ ギムナジウム（高校）

こちらは 16 歳～18 歳を対象としており、200 人ほどの生徒がいる。中学校と同じく、パッショネート・インタレストの授業があり、バスケットボールをはじめ、コンピュータゲームのプログラミングをやるなど、中学校よりも少し水準の高いことを行っている。

Ⅲ フォルクハイスクール（市民高等学校）

１８歳以上であれば誰でも入学可能で、仕事のための資格が取れる。この学校は、スカウトのスウェーデン支部と YMCA とが共同で運営している。スカウトは、日本でいう「ボーイスカウト」と同義である。スカウトは、「*青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として自らの肉体的、知的、情緒的、社会的、精神的可能性を十分に達成できるように青少年の発達に貢献すること*」[6]を目的として、世界中で活動している。YMCA は Young Men's Christian Association（キリスト教青年会）の略で、キリスト教主義に立ち、教育・スポーツ・福祉・文化などの分野の事業を展開する非営利公益団体である。

4.2.2 パッショネート・インタレスト（情熱的な興味）

パッショネート・インタレストは、各学校の教科のひとつにもなっている、余暇活動のような開かれた活動である。フリースヒューセットの中でも最大規模のもので、体育館、スケートボードパーク、レコーディングスタジオ、ステージ、クラブ、ＤＪスタジオ、シアター、食堂などの施設が完備されている。

遊びのような余暇活動は、若者の学びを育む有効なツールだと考えられている。また、性別や人種などの多様な若者たちが混合で活動を行っており、その活動の中で、人権、平等を学んだり、スウェーデン語が学べたりするようにデザインされている。ほかにも、若者が社会起業家となるための育成や研修を行うものも存在する。

4.2.3 労働市場へのプログラム

非雇用状態にある若者が仕事をするための、サポートをするプログラムを行っている。

---

[6] 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟[http://www.scout.or.jp/]より引用

4.2.4 ソーシャルワーク

20 種類以上の多様な社会的プロジェクトを展開している。ターゲットを絞ったアプローチを行っているのが特徴である。それぞれのプロジェクトには必ず専門の資格を有している職員を配属させていて、さらに専門の職員の中には、過去につらい経験をしたワーカーが多く、そういった状況にある若者の気持ちに共感することができ、寄りそうことができるので、関係を築きやすい。

フリースヒューセットは NGO であり、民間団体であるので、活動資金も各プロジェクトそれぞれで助成金をとっているのが特徴である。

多様なソーシャルワークのひとつに、ネオナチ[7]をはじめとする国家主義的な活動やそのグループを抜け出すために支援する、EXIT(イグジット)というプロジェクトがあり、ロバートさんはこれに関わっている。

4.3 質疑応答

Q1. 男女比はどのくらいか

A1. フリースヒューセットの男女比は、ほとんど 1:1 である。

Q2. 職員はみんなユースワーカーのライセンスを取得しているのか

A2. そんなことはない。持っているに越したことはないが、プロジェクトによって求められている人材が違う。イグジットであればカウンセラー、元ネオナチから脱した経験のある人など、特定の資格や専門知識を持っている人や、バックグラウンドを持っている人の２つのタイプのプロフェッショナルがいるので、必ずしもライセンスで判断されない。

Q3. 成人もくるのか

A3. プロジェクトによって違うが、ローラースケートは 0～17 歳のみを対象としている。他のソーシャルプロジェクトの対象になるのは、若者や、３０代、４０代くらいの大人たち、それと保護者が関わったりする。

Q4. 政治家や会社員が来たりするのか

A4. ここは有名で、とてもよい場所なので、たくさんの政治家がフリースヒューセットを訪れる。写真を撮ったり、若者の分野に関心を持ってもらうためにロビーイングをしたりする。

Q5. ロバートさんをはじめプロジェクトをやっているユースワーカーの人たちは、活動を通して、ここに来る若者の人生にどのような影響を与えると考えているか

A5. 若者の声を社会に届けること、そして若者のやりたいことの実現を支援すること。若者に「これをやれ」というのは違う。包括的に、より多くの若者を巻き込むようにしている。

---

[7] ネオナチ：ナチズムを復興しようとする政治的運動の総称。俗にいう極右。

若者が、政治的にも社会的にも、彼らの空間を社会にもたらすことが大事だと考えている。たとえば、音楽活動をやっている若者が多いが、実際には、安い給料で働かされていて、生活状況があまりよくない若者たちが多い。そんな人たちに機会を与えて、成長を促し、社会的なスペースを創りだすことが私たちの使命だと思っている。

Q6. 若者と関わる上で一番大切にしていることは
A6. これこそがフリースヒューセットで大切にしている、核心的な価値観と関わっていることだと思うが、若者に”What do you want to do?”「君は、なにをしたいんだい」 と聞くのではなく、”What do you want to do with us?”「君は、私たちと一緒に、なにがしたいんだい」と聞くことが大切なのではないかと思っている。もうひとつは、誰でも巻き込むこと。それこそ、昔誰かを傷つけてしまった人や、犯罪に手を染めてしまった人でも、ここに来ても良いという姿勢が大切だと考えている。

Q7. 若者たちはここで大人とも関わるのか
A7. もちろん。関わる大人には、若者の声を聴いて欲しい。大人もそれで成長する。これまでスウェーデンでやってきたことは、「若者たちはこういうことをやりたいと思っているんだ」という、大人の価値観の一方的な押し付けであった。それよりも、若者たちの声を聴いて、彼らのやりたいことに耳を傾けることの方が、より建設的だという考えのもと、若者と大人を関わらせている。

Q8. ユースワーカーのトレーニングはあるか
A8. もちろんトレーニングはある。イグジットでやっていることは、ネオナチに関わってしまった若者とどのように接するか、という話し合いをすることや、アメリカで開発された「モチベーショナルインタビューイング」という手法を用いたトレーニングもある。

Q9. 情報共有はどうしているのか
A9. 1 つのプロジェクトが中心となって若者たちの情報を共有したり、若者に関する社会的問題に関して議論したりするイベントがあり、それを定期的に行うことによって情報共有をしている。フリースヒューセットは有名だから、様々な専門機関などとの関わりがあり、助けてくれる人がいる。
ヒュースビーという、2013 年に大規模な若者の暴動があったところにも、フリースヒューセットが建てられた。暴動が起きた時に、ヒュースビーの人がここに来て、どうすればいいか話し合い、建てられたのだという。

Q10. 日本には若者の居場所が学校しかないが、これについてどう思うか
A10. 学校はとても重要である。でも、それと同じくらい、放課後や週末は重要だ。

5 VotelT(ボウトアイティ/ボウトイット)

日時　2014 年 6 月 11 日
場所　ストックホルム市内
先方　ロビンさん（34 歳、プログラマー。14 歳から若者団体に所属していた）
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　土肥潤也

5.1 概要

VotelT は、オンラインで民主的で参加型の会議を開催するのに役立つウェブツールである。VotelT には、議題、議論、提案、世論などがスマートで簡単にインターフェイスにまとめられている。利用者はミーティングのファシリテーターやモデレーターを自ら設定し、利用者が望む場合、新しい議題や世論調査などを設定できる。

ロビンさんがベータハウスの立ち上げをした、技術者 4 人の団体のプロジェクトの一つとして生まれたのが VotelT で、他の 4 つの若者団体と共に創り上げた。VotelT を創設したのは、スヴェロック（“Sverok”）という、コンピュータでゲームの流行を発信・収集する青年組織である。これは、全国 1,100 箇所に拠点を持っており、11 万のメンバーから構成される大規模な青年組織である。

相続遺産を、スウェーデンの若者団体（26 歳以下）向けの、民主主義促進プロジェクトのために寄付する基金があり、その基金に応募をした。

5.2 VotelT ができるまでの経緯

前述したように、VotelT はひとつのプロジェクトとして、「スヴェロック」や「ベータハウス」など、いくつかの若者団体が協力し創り上げた。VotelT プロジェクトでは、最初、ネット上で議会を真似たものを作ることとした。しかし、作ってみると、実際の議会の悪い点ばかりが集まり、うまくいかなかった。

～ネット上で議会を創ることのメリット・デメリット～

メリット	時間や場所の制約がないこと。小規模でも効果的な議論ができること。
デメリット	社会的規範（例えば、一人の人が長く話してしまうことや、相手の立場に立って考えること）をネット上では守ることが難しいので、議論で生じた対立・矛盾が頻繁に起こり、それに対処することができないこと。

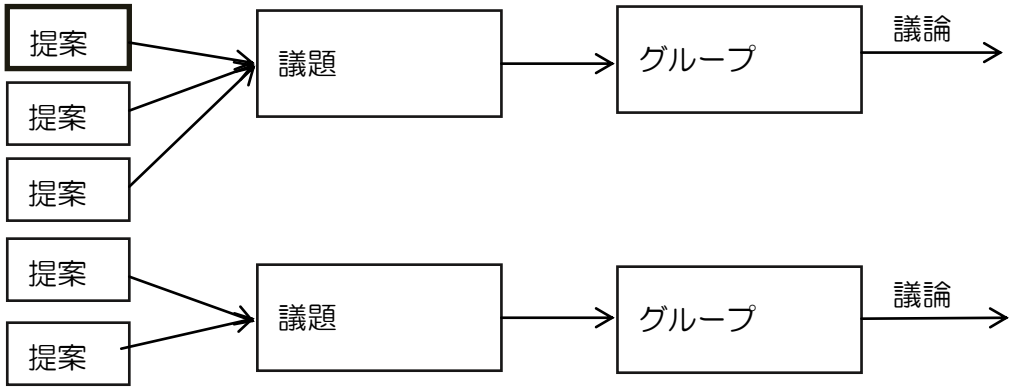
ネット上の議論では、それを利用するユーザーが、ソフトが議論を進めてくれると思い込んでいるため、社会的規範を守った議論をすることはなかった。そこで、あえてソフトを複雑化せず、賛成・反対とそれに対する意見が見ることができるのみの、単純なものにすることにした。それによりひとつのページに情報が集まることで、パソコンが苦手な人にとって、ページをたくさん分けるよりも簡単に利用することができる。

VotelT は、今までに 100 回以上の会議に利用されていて、10 人規模から 16,000 人規模の会議に用いられた。

5.2.1 実用例「みどりの党」”Environment Party”

政党の公約（マニフェスト）をつくるための、プラットフォームを VotelT 上に作り、（公約の）アイデアを提案したり、それを議題ごとに分けたりすることができるようにした。これには、全体で 2,000 人が参加をした。

全部で 1 万５千の提案がなされ、それをテーマごとに議題を分け、議題でグループに割り当て、提案を検討した。同じ政党の議員同士でも、ネット上で可視化された議論で見比べると、グループごとで意見の違いや、政党の理事会との考え方の違いなどが見えて、議論が活発化した。



例えば、福祉分野への民間企業の参入についての議論では、上層部である理事会では、賛成することを固めていた。しかしながら、グループ内での議論で反対意見が出され、その後、党大会で審議にかけると、実に 8 割が反対意見を示した。普通の政党では、理事会の考えに背くことはしないが、VotelT を用いることで、集団での意見形成がよりしやすくなる。

5.3 質疑応答

Q1. このサイトは誰でも利用可能なのか

A1. もちろん。このシステムはオープンソースとして公開されているので、日本語に翻訳して使うこともできる。[英語ページ](http://www.voteit.se/in-english/)

Q2. みどりの党の議論に一般市民は参加可能か、見ることはできるのか

A2. 党大会は基本的にテレビ放送がされるので、誰でも視聴可能である。スヴェロックが以前行った取り組みは非常に面白かった。党大会のテレビ放映とは別に、ネット上で党大会を放送しながら、ネット上の視聴者がリアルタイムでコメントをつける仕組みであった。

Q3. スヴェロックのメンバーはどんな人なのか

A3. ゲームのプロフェッショナルが多い。ボードゲームや色々なゲームをする人がいる。ロールプレイングゲームをしているユーザーは、組織化や合意形成など、普段から民主主義を実践しているようなものなので、民主主義の達人であるともいえる。

Q4. 実際にどのように、ページが動くのか見せてほしい

A4. http://www.voteit.se/

実際の会議にもこのサイトは利用されていて、意見をネット上に書き込むので、議事録をとりながら会議をすることができる。

従来の投票の問題として、似たような意見があった時に票が割れてしまい、人気のあるものではなく、やや人気のあるものが一番になってしまうことがある。そこで、投票方法をイエスかノーではなく、選択肢に優先順位をつけることを可能にした。

例えば、「次のうちどの果物を購入したいか」という問いに対し、下記のような投票が可能である。

投票 1：みかん＞ぶどう＞りんご＝どちらでもない

投票 2：みかん＝ぶどう＞りんご＞どちらでもない

※矛盾が生じる選択は用いることができない。（じゃんけんのグー、チョキ、パーなど）

政治的な課題とは全く関係のない議題（例えば、好きな色はなにかなど）のページを設けることで、まず VoteIT を使ってもらい、利用することが難しくないことを実感してもらえるようにしている。

フィーカというページを設けておいて、フリートークをすることもある。そのページから、議題が生まれ、新しい議論が生まれることもある。こうしたコーヒーブレイクをして、リラックスをするページなどを設けることもある。

Q5. 投票の方法は誰が設定するのか

A5. 大抵は、会議のモデレーターが設定をする。政党などの、組織が利用する際は、投票方法は団体の規則で決められていることがほとんど。

Q6. 匿名性の問題は

A6. 匿名であることは強制ではないが、完全に匿名にすることも可能である。議論に参加をしたいときは、メールアドレスで会議に参加申請をし、モデレーターの人がそれに対応すると、チケット（URL）のついた返信が来る。モデレーターが、チケットなしの設定にすることも可能である。

Q7. 一人一票の仕組みを徹底できるのか？メールアドレスを一人の人が、２つ以上持っていたら投票権が 2 票あることにならないのか

A7. ２つのメールアドレスが同一人物かどうかを調べるには、高いレベルのセキュリティシステムが求められ、セキュリティを高くすると、簡単に誰でも利用できるという利点が失われるため、そこまでしようとは考えていない。

Q8. 直接民主党との違いは何か

A8 .VoteIT は単なるコンピュータシステムに過ぎず、直接民主党はそれを用いた政党である。ベータハウスは、直接民主党と似た考えを持っていて、人々の権力の分散化を広げていくことを目的

にしている。西欧社会では、権力の格差が広がるヒエラルヒー社会になっている。それを、フラットにしていくことが必要であると考えている。

Q9. なぜ民主主義の実践の場をインターネット上に設けようと思ったのか

A9. 民主主義を少人数で実現するのは、難しいことではない。しかしながら、民主主義の規模を拡大していくには、常に技術の進歩をフォローアップしなければならない。議論において、人々に貢献してもらう、してもらわないということを言いたいのではなく、より良い考えを構築していくためには、より多くの人の意見が必要で、それらの意見や考えを客観的につなぎ合わせていくことが必要である。

また、大きな集団になるほど、特定の時間に合わせて、全員で会うことは難しいので、ネット上で議論をすればいいのだと考えた。論理的に、現実の社会では、複数のミーティングを物理的につなげることは不可能であるが、それはオンラインで行うことは可能である。

実際のミーティングでは、費用がものすごくかかるが、オンラインミーティングではすべて無料で利用することができる。これまで、現実社会のミーティングでできなかったようなミーティングを、オンラインミーティングでは実現している。しかし、だからといって民主主義の実践のために、必ずしも技術を必要とするわけではなく、技術は民主主義の実践をより容易にする道具に過ぎない。それは今に限らず、テレグラフを使っていた時代から必要とされていた。

人々はいま、民主主義を恐れている。というのは、ヨーロッパで経済危機が訪れている中で、右翼の人達が、賛成をしている。彼らは、民主主義的な考え方をしていない。現在、私たちは、民主主義の危機に陥ってしまっているのだ。実際に、いまタイで起きていることも具体例になるだろうし、軍事政権が権限を握ってしまい、透明性を失ってしまっている。民主主義の質を高めるには、透明性の確保が必要であるが、ある特定の人達が情報を独占している。

そこで、誰かが、今社会で何が起きているのかを理解している必要がある。その方法の一つが、ジャーナリストたちの活躍により機能していたので、ジャーナリストは重要であり、今後もその方法を守っていくことが必要である。

ただ、スウェーデンのジャーナリズムも変遷してきていて、以前はジャーナリストがしっかりとスウェーデン政府を監視してきたが、現在は、景気があまりよくないこともあり、利益追求に目を向けすぎて、メディアがエンターテイメント化している。メディア界がエンターテイメントを重視するようになったため、ジャーナリストの数はここ 10 年間で半減している。

そこで、それを解決するために行われている取り組みが、オンラインのプラットフォームを作り、そこにジャーナリストだけでなく、様々な分野の専門家や有識者が参加し、政府の行っていることに関して監視をするシステムを構築することなのだ。

いまは公的機関への信頼が減ってしまっている。なぜなら、公的機関が何をしているのか、市民には何も見えない。そうしないために、政府が行っているのが、インターネットを用いて、意思決定の段階から市民に参加してもらうことである。

インターネット技術の発展によって、民主主義の基礎が変わってきているように感じている。それに合わせて、政府やそれに付随する機関の基礎も変わりつつあると感じている。

6 全国生徒会連合（Sveriges Elevkårer）

日時　2014 年 6 月 11 日 15:00～17:00
場所　Instrumentvägen17 126 53 Hägerstensvägen
先方　マティアスさん、オスカルさん
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　武田清香

6.1 団体概要

1938 年に設立された、スウェーデンで最も歴史が古い団体の一つ。何度も団体名を変更している。現在は「全国生徒会連合」として活動している。スウェーデンの高校の生徒会をまとめる役割をしていて、20 歳前後の若者が運営している。

6.1.1 歴史

最も大きかった出来事のひとつが 1966 年のティーチャーストライキだった。教師たちが、賃金などの労働条件の改善を求めてストライキを起こし、高校に教師がいなくなった。そこで、ストライキ中の 2 週間の間は生徒会長が校長となり、成績の良い生徒が先生となって生徒が学校を運営した。

2009 年、自分たちがやりたいことをできるようにするために、学校から完全に独立した。

6.1.2 活動理念

ミッション[8]は、「スウェーデンの生徒会が学校でより良い時間をつくりだせるように生徒会を強くすること」、ビジョン[9]は、「スウェーデンのすべての高校が権利を守り、メンバーの興味を促進することに成功した生徒会を持つこと」である。

彼らが重要視しているのは、民主主義、継続期間、仲間に注目すること、透明性、可能性、団結だという。

スウェーデン全国の生徒会の半数である 315 の生徒会が生徒会組合に加入しており、実に 18 万の高校生が関わっている。また、中学校は関わっていない。

[8] ミッションとは、その団体の使命、存在意義のこと。
[9] ビジョンとは、その団体の目標、目指すべき姿のこと。

6.1.3 活動規模

年間取引高は 2,100,000 ユーロ(日本円で約 3 億円)で、そのうち 88%は政府からの資金援助である。フルタイムで働いている人は 35 人。

6.1.4 目的

三大優先事項

- 生徒と生徒会のための強い権利の制度制定
- 生徒に不当なまたはまちがった成績であると主張する権利を与える
- 物理的、精神的、社会的な環境という点から生徒のための学校環境を改善する

生徒会連合が活動するのではなく、各地域の生徒をトレーニングし、エンパワメントし、リーダーにして、彼ら自身が学校や地域に影響を与えられるようにすることを目的に活動している。

多くの人数で意思決定をすることは難しい。左翼的な考え方も、中道的な考え方も、右翼的な考え方も、各学校の生徒会によって考え方が違う。これも、各自が意思決定できるようにする目的の一つである。学校と生徒会がよりつながることにより、生徒が学校に影響を与え、彼らのやりたいことを促進して、それがより容易に実現できるようにすることが一番の目的である。

6.2 主な活動について

目的の項で述べた生徒のトレーニングは高校生が対象だが、それとは別に、中学生を対象としたトレーニングも行なっている。ほかにも、学校環境を良くするためのプロジェクトや、生徒に権利について教え、それに関する書籍の作成も手掛けている。例えば、生徒の権利について教える書籍を作り、生徒が行うことのできる行動や力を教えることで、強い生徒会づくりを推進する。各書籍は、加盟団体に無料で配布されるほか、校長にも送る。

また、EU 選挙とスウェーデンの国政選挙が今年(2014 年)開催されるのに合わせて、学校選挙でも選挙を行う。18 歳以下の生徒であれば参加でき、それを通して生徒が選挙に関わる機会を提供する。

6.3 メンバーの活動

オスカルさんは、視察に行ったメンバーたちと同世代の 19 歳で、全国生徒会連合の最年少のメンバーである。欧州若者議会（”European Youth Parliament”）にも所属している。欧州若者議会は、38 のヨーロッパの国（ロシア、ギリシャ、トルコ、ノルウェー、グルジアなど）で活動している。完全な若者による活動であり、教育的な活動をしている。個々の議論のための技術を上げることだけではなく、組織力（資金面など）を上げるための機会を提供している。学校内外で活動しており、先生に対しても働きかけを行っている。

生徒会の形態は、スチューデント・カウンシル（生徒評議会）とスチューデント・ユニオン（生徒会連合）がある。カウンシルは、学校が設置する機関という位置づけであり、先生主導で、あまり意見を聞いてもらえないことがある。そうではなく、ユニオンや、生徒たち自身が主催できる生徒会として、学校に働きかけることができるようにすべきで、そのための本を出版している。様々な活動をしたい場合は、しばしば、先生から完全に独立する必要が出てくるのだ。

6.4 質疑応答

Q1. 全国生徒会連合に所属するのは、成績が良い人たちなのか

A1. 結果的に成績の良い人が集まる。職業学校からの人もいるので、基本的にはその人たちの成績はさまざまである。どのように職業学校の人や移民の人にも参加してもらうかという問題は、スウェーデンのさまざまな若者団体がずっと議論し続けていることである。

Q2. どうしたらここで働けるのか

A2. ほとんどの人が元生徒会長。卒業後に生徒会連合で働くことを申し出る。2,3 年ここで働いた後に、大学に進学する。ここで働いている人の平均年齢は 22 歳。

Q3. エンパワメントをするために何を大切にしているのか

A3. おもしろおかしくすることが大切。サッカーのサポーターイベント等もするが、政治的な議論も行う。生徒会に所属していることが楽しくかっこいいと感じてもらえるようにする。

Q4. 生徒会連合の人たちは、政治家はどんな存在だと思っているのか

A4. 政治家は、学校であっても学校に限らなくても、とても近い存在である。しかし、生徒から見た政治家の印象は、常に改善の余地がある。政治家はよく校長や教師の話を聞くが、生徒や学校内部のことには耳を傾けていないことがある。それが生徒会連合の存在する意味でもある。

Q5. 他にも仕事はあるのになぜ普通の仕事とは少し異なる生徒会連合で働こうと思ったのか

A5. 皆、このような活動が好きであり、高校生時代に生徒会で良い時間を過ごしたからであろう。そこで会う人々はみんなすばらしかった。

Q6. 学校から独立してどう変わったか。

A6. 加盟者が増えるかと思っていたが、そこまで成功していない。校長が、より生徒会が活発になることを恐れて、生徒会連合への加入を拒むこともある。

© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

7 ヨーテボリ市文化局

日時　2014 年 6 月 12 日
場所　Stadsledningskontoret 404 82 Gothenburg
先方　ヨルバさん、ボーギルドさん、ペトラさん、ラースさん、ラモルナさん、アンニカさん
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
報告者　武田清香

7.1 ヨーテボリ市ついて

ヨーテボリ市は、約 400 年前にできた、文化的、国際的な町である。オランダやイギリスなどさまざまな国の人がいる。大きな町であるため、たくさんの人々が働いており、およそ 50 万人が住んでいる。

この町の住民の利益のために、国際的な共同を大切にしている。共同のためには、日々の生活に対話を取り入れることが大切である。そのために社会の様々な集団(市民、団体、大学、研究者たち、生徒)やさまざまな人と関わっていくことが大切だと考えている。

ヨーテボリ市は 10 の区画に分かれていて、市役所は 25 の部局に分かれている。そのうちの一つがこの文化局。営利的な事業を司るもの(暖房の会社や不動産の会社)もある。文化局国際課は、市議会と関係が深く、世界各国で起きていることについての情報を市議会に届けている。

7.2 「子どもの権利」に関して

7.2.1 予算

市の予算を決めるにあたり、常に子どもの権利について気にかけている。以下 4 つが今年の予算において大切にされているものである。

Ⅰ 予防

中退者の予防をする。スウェーデンにおいて教育は大学まで無料であるが、それでも多様な要因で中退をしてしまう人がいる。移民が多いスウェーデンでは特に、異文化同士の対話を大切にすることで中退者を減らそうとしている。

Ⅱ 影響力

自分たちの意見を出し、政治家に伝える場を設ける。ユースアセンブリ(区ごとの若者の代表者)と、その代表者で構成されるユースカウンシル(若者会議)を設置した。ユースカウンシルは、16～18 歳の若者で構成されている。そして、ユースアセンブリが、ユースカウンシルに対して、自分たちの要望を出す。

若者から、若者を対象に、24 時間バスを乗り放題にしてほしいという意見が出たので、今年の夏の間にそれが実現する見込みだ。

Ⅲ 福祉

健康的な食の促進のために、学校給食を調理する人向けの教育をする。たとえば、各学校の給食メニューを表彰する制度を設けて競争心を刺激したり、スペインの腕のいいレストランシェフが、料理を指導したりして、給食をより魅力的で健康的なものにしようとしている。

肥満に関する授業や、スポーツや文化的な活動にも力を入れている。

Ⅳ 自己肯定感

若者たちの自己肯定感を高めることを目標にしている。

7.2.2 欧州各国との連携

Ⅰ European 2020 Strategy

ヨーロッパにおける雇用、教育、社会的排除の問題に取り組むもの。その中でも、雇用や社会的排除というトピックは新しく、ヨーロッパの経済危機によって挙げられたものだと考えている。スウェーデンでも若者の失業率は高い。

具体的な成果指標としては、中退者の割合を 10%以下にすること、貧困のリスクにある人や社会的排除者の割合を 14%以下にすること、30～34 歳の高等教育終了の割合を 40～45%にすることなどを、2020 年までにスウェーデンで達成できるようにする。

Ⅱ EU-projects 2007-2013

町に安定をもたらし、犯罪を予防することが目的。教育や社会的包摂により、若者を労働環境へ結びつける。Iter(道)プロジェクトでは、ドラッグ使用者など不安定な立場にいる若者や労働環境から離れている若者たちを包括的に支援した。その結果、社会保障給付を受け取っていた若者たちが、受給の必要がなくなった。

Ⅲ ヨーロッパ都市連合

ドラッグに反対している国と協力している。ドラッグが合法的な国(オランダ等)と折り合いをつけることが難しい。関係機関にはたらきかけている。社会問題に関する分科会では、ヨーテボリ市がリーダーシップをとっている。人口 25 万人以上の都市が加盟できる。

Ⅳ Access City Award 2014

Access City Award 2014(アクセスしやすい観光都市賞)を受賞した。受賞したことについて、市民の周知に努めている。

7.3 ラースさんのプレゼンテーション

ラースさんは、子ども・若者のための建築アドバイザーという、スウェーデンに２人しかいない職業をしている。

7.3.1 若者の街計画

川辺の街であるヨーテボリ市を、若者でつくりあげていく、若者の街計画（”Young Rivercity”）という計画があった。スウェーデンで行われた試験的な事業で、北から南の 6 つの自治体が一緒に行なった。スウェーデンのいろいろな局(建築局等)と協力し、ヨーテボリ市のビジョンの中に若者の視点を入れるために行われた。これには多くの人が参加し、300 人の若者、様々な学校から 12 クラスが参加した。

最初に「10,30,50 年後にどんな町になっていると思うか」と「今から 10 年後どんなことをしていたいか」という質問をし、それを踏まえ、6 つのステップを踏んで若者の街計画を進めていった。

Ⅰ スタートアップ

美術館に市民を招いて計画を見せ、何が始まるのか説明した。

いろいろな立場を代表する人がいるため、それぞれの立場の人の集まりを複数作った。

Ⅱ ラーニング

自分の好きな場所についての記録をとった。町の将来について考えるためには、町についての知識が必要なので、テーマ(名所、歴史、開発等)ごとに分けて勉強する機会を設けた。

夏休み期間には、違う学校の子と交流し、ビンゴゲームを作って知識を深めた。

Ⅲ クリエーション

学校に専門家を派遣し、アイデアをプレゼンするために、さまざまな方法で計画について引き出した。例えば、模型やスケッチ、マインクラフト[10]等を使った。

子どもたちのアイデアをブログにアップロードして、他の人のアイデアを見ることで、自分のアイデアが全体のアイデアのどこにあるのか確認できるようにした。

Ⅳ アセンブリ

なぜアイデアが出たのか説明してもらった。参加した学校のうち 2 校は、アイデアから共通点を探し出しまとめた。

Ⅴ エキシビション

アイデアを展覧し、様々な人のアイデアをお互いに見合った。

Ⅵ フィードバック

自分たちの発表をまとめ、自分たちで作った資料や動画を見て振り返りをした。

初めは、多くの大人たちが、子どもたちをこの計画に参加させない方がいいと思っていた。それは、子どもたちが変なアイデアを出して、それが実現されなかった時に失望するのではないかと考えたためだった。しかし、町に関する知識を与えてから参加させると、子どもたちは大人や専門家と同じくらいすばらしいアイデアを出すことができた。だから、子どもたちを早くから町の行政に参加させることはとても良いことである。子どもたちだけを排除する必要はどこにもないのである。

若者の街計画のすべてを実現するには、とても時間がかかる。そこで、カナル広場という公園を用いて、できるところから子どもの意見を反映させている。8～16 歳の子どもが参加し、17 歳以上は大人として参加した。

[10] “Minecraft”。スウェーデン人が作った、世界中で人気の 3D のブロックアクションゲーム。すべてが四角のブロックで表現されていて、冒険をしたり、建築をしたりすることができる自由度の高い PC ゲーム。画像はマインクラフトの実際の画面。

7.3.2 SVID(デザイン会社)

英語では、“Life science products Swedish prison and probation service”という、ラースさんが働いていた、生活科学製品を扱っているデザイン会社がある。名前の通り、保護観察下にある人たちと一緒に様々なデザインや製品を作っている。

この会社では、かっこいいから買うのではなく、必要だから買う商品をデザインしており、特別な需要を持っている人(高齢者・障害者など)を対象にした商品を扱っている。一般的に、こうした商品は需要が少ないため、高かったり、見ためが悪かったりする。この会社では「障害者のニーズに基づいた商品ではあるが、すべての人が使える商品を作ろう！」という視点を持ち商品開発をしている。具体的には、値段を下げ、使っていて恥ずかしくない美しいものを開発しようとした。

元犯罪者たちと、転びやすい高齢者のことを考えた廊下のライトをデザインした。高齢者のための商品をデザインした理由は、高齢者は身近であり、自分が高齢者になった将来について考えてもらうためであった。生活科学製品のための、新しい革新的なデザインの解決策を見つけ、その上で、研修生として来た人が高齢者の日常的な問題を知り、理解し、デザインの解決策を見つける機会を得る。このことは、会社にとっても、高齢者にとっても、そして労働者にとってもよいことである。

そして、創造的であるために、「どのようにより創造的にするか」といったデザインの課程について学んだ。刑務所内で元犯罪者が作る商品は古風で売れなかったので、刑務所で作る商品の商品開発に協力し、一緒に商品開発について学び売れるような商品を作ろうとした。

7 人の元犯罪者が関わったが、製造における様々な困難に直面した。その困難な状況が、技術の向上につながり、苦労をすることで自己肯定感を高めることができた。

8 Frilagret(フリーラグレット)

日時　　2014 年 6 月 12 日(木) 13:00～15:00
場所　　Frilagret HEURLINS PLATS 1　413 01 Göteborg
先方　　ダニエルさん
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　水島滉大

8.1 施設概要

フリーラグレットは、スウェーデン第二の都市のヨーテボリにある、若者のためのカルチャーセンターである。若者たちが、自分たちで率先して、どんなことをフリーラグレットでやるかを決めている。ここで起きているすべてのことは、若者の依頼や、独創的な提案から成り立っている。

この施設が始まったのは、1998 年の若者の集まるディスコに放火がされて、60 人余の若者が亡くなった事件がきっかけであった。その際に、政治家は若者が自由なことをできるような場所を提供したらどうかと提案し、フリーラグレットの前身となる施設が始まった。しかしながら、その施設の場所にカジノを建てる計画が進み、若者たちはその施設から追い出されてしまった。それから、この周辺にはユースセンターのような施設は存在しなかったが、2011 年に再度、若者の居場所が必要だということが話し合われ、2013 年から若者たちを雇い始めて、フリーラグレットが昨年始まった。

フリーラグレットでは、13 歳から 30 歳までの若者の参加を求めている。洗練された環境で、意欲的な若者自身が働くことで成り立っているこの施設では、可能性をつくりだし、全ての人の興味

に合わせた文化を共有できる場所を提供している。また、若者を、ヨーテボリの芸術的で文化的な生活へと参画させるねらいもある。

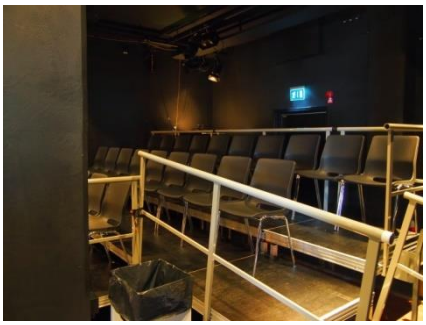
8.1.1 カフェ

施設に併設されていて、人々が Wi-Fi を利用できる場所である。ログイン不要の Wi-Fi スポットを実現したいが、今は市の決まりでそれはできない。しかし、若者をはじめとした地域の人々が求めているため、近々変わるだろう。

8.1.2 映画館

映画館がある。ただ映画をみるだけでなく、セミナーも行われる。用途に合わせて椅子の配置を変えることができ、ファッションショーやブレイクダンスもここで行われる。

8.1.3 ギャラリー



展覧会を行う。専門家の人も来てくれて、一緒に展示するのを手伝ってくれる。動画を流すこともできて、モニターもたくさん用意している。

ダンスや展覧会の開催時間をあえて重ねることによって、いろんなものに興味を向けてもらえるようにする。ヒップホップに来る人は、最初はそれにしか興味がないが、ここに来ることを通じて、他の分野にも興味を持ってもらう。

8.1.4 ホール

同様に、様々なイベントを行えるホールがあり、ダンスパーティやビリヤード、様々なワークショップを行っている。

イベントスペースを使うとき、たとえ自転車修理のワークショップが 5,6 人の参加者であって、同時に行われるダンスパーティが 500 人規模であったとしても、等しい割合でスペースを共有してイベントを実施する。それは、2 つとも等しい価値があるからだ。

8.2 主な活動について

8.2.1 若者の活動

フリーラグレットのキーワードは、若者参加である。ここでは、男子も女子も、いろんな人種の人も含んだ、まさにこの街の人口構成をそのまま鏡に映したような、様々な人が参加しているファシリテーター講座をしている。15 歳から 27 歳までを対象にしており、文化的な事にすでに興味のある人も参加しているし、ない人も参加している。また、しゃべるのがもともと得意な人も参加しているし、講座の中で自身を成長させる必要のある人もいる。

前述したが、この施設での活動を作り上げていくのは、若者である。ここの文化がどういう文化であるかは、あえて決めておらず、来てくれている人それぞれに、ここの定義をして欲しいと思っている。そんな理由もあり、活動は非常に多岐にわたる。主に 9 つのテーマに分かれており、「映画とメディア」「文学と詩」、「舞台芸術」、「運動・ダンス」、「アート・画像」、「音楽」、「社会との議論」、「デザインとクラフト」、「その他」というテーマに分けて活動をしている。

8.2.2 共同意思決定 “Co-decision Making”

意思決定の過程において、若者を巻き込むことは、重要である。いろいろな意思決定の過程があると思うが、そのなかでも、共同意思決定は重要である。大人だけで決めるよりも、若者と共同で意思決定を行う方が、はるかに難しく、時間もかかるが、それでも、若者と共同で意思決定を行うことに、強い必要性を感じている。

共同意思決定を行うためには、自分の立場による力を、自分自身で正しく認識し、コントロールすること、そして人を信じることが必要である。

8.2.3 ディープ・デモクラシー

意思決定の仕方の例として、「ディープ・デモクラシー」という考え方がある。人々は常に YES か NO かの選択を強いられており、葛藤の中で意思決定をしなければならない。そこで意思決定をするためには、深く自分の心の中まで探求しないと答えが出ない。

たとえば、フリーラグレットの名前を変えるか変えないかの話になったときに、28 人がそのままでよい、2 人が変えたいと言った。当然のことながら、28 人の意見が採用されるが、残りの 2 人が重要な意味を持つ。否定の中にこそ、真の知恵が隠されていると考える。それを理解することによって、YES がもっと強力な意味のものになる。次に名前を変えるという話題があがったときは、その 2 人が対話において重要なパーソンになるだろう。

8.2.4 本物に触れる

フリーラグレットに来た若者たちには、なるべく「本物」に触れる機会を提供することを心がけている。それも、イベント開催時本番に会うのではなく、準備段階で出会わせる。

たとえば、アートに興味がある若者に、その人がたとえ初心者でも、本物のアーティストとの出会いをさせようとしている。

8.2.5 住民と若者との対話の場

上述した以外にも、住民と若者との対話の場を作る活動もしている。スケートボードやダンスとなると、どうしても騒音問題が生まれる。その際に、住民と若者が衝突することがあった。そこで、住民と若者の間で対話の機会を作り、時間をかけて深く対話することによって、治安が良くなった。

8.3 質疑応答

Q1. ユースセンターに「居つく」という現象について、どう捉えているか

 © 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

A1. ずっと議論してきたことで、そういうことも予測していた。それを防ぐためには、ここでやっていることを流動性の高いものにする、たとえば、この日はビリヤード、次の日はファッションショー、次はダンスイベントとしていく。カフェを除いて、起きていることは日々違うから、若者が固定化することがない。

Q2. ほかの階はフリーラグレットの施設ではないらしいが、不満の声はないのか
A2. 騒音の問題で、不満の声が漏れることはある。しかし、一定の理解を得ている。

9 ヨーテボリ大学文化健康センター

日時　　2014 年６月１２日(木)
場所　　Centre for Culture and Health Box 200 405 30 Gothenburg
先方　　オーラさん（健康文化センターの職員であり、体系的神学の研究者）
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　長島佳寿美

9.1 施設概要

ヨーテボリ大学文化健康センターは、３年前、オーラさんが副学長に任命されてこのセンターの責任者になった際に設立された。このセンターは、自然科学や社会科学、医学など、他の様々な学部・分野とコラボレーションをすることにより、研究を進めることを目的としている。文化と健康の関わりについて、当初は医療分野の専門家たちが、音楽が身体によい影響を与えるのかどうかについて研究を始めたが、研究を進めるうちに、音楽だけを独立して考えることはできず、文化という広い視点から考える必要がある、ということがわかった。それから、文化と健康の関わりについて研究するために、まずそれぞれの定義について考えることから始めた。

9.1.1 文化について

英語では、文化とは芸術のような意味を示す。しかし、スウェーデン語の「文化」とは、音楽を聴くことや、連想をすること、あるいは映画を見ることなどを意味している。しかし、「文化」には、社会的な意味もある。例えば、典型的なスウェーデン人としてのあり方（模範）を意味することもある。

前者と後者の「文化」の意味が異なるように、「健康とは何か」という捉え方も異なる。もちろん、日本とスウェーデンでも、「文化」の意味が違うので、捉え方は異なることになる。

9.1.2 健康について

健康とは身体的に病気がないという意味で、WHO(世界保健機関)の定義では「精神的社会的に幸福な状態」という意味が用いられている。それは、精神的、身体的、社会的幸福な状態を示す。

「健康」も「文化」もどちらも幅広い意味を持ち、意味を具体化しづらいものである。捉えづらい研究課題を意味づけて、特定のプロジェクトに落とし込むために、分野を絞り込む必要がある。意味合いの範囲が多すぎるので、特定の分野に特定して、研究するということである。イギリス、アメリカ、日本から「文化と健康」の関わりについて、学び、それらを、メディカル・ヒューマニティ（医療人文学）、グローバルヘルス、そして芸術と健康、の３つの分野に分けることにより、実際に研究が実施可能になると考えた。

Ⅰ グローバルヘルス

健康が性別や歴史、宗教、場所、伝統によって、どのように関連づけられるのかを研究する。

Ⅱ 医療人文学

1960 年代にアメリカで認識され始めた分野で、この大学でも実際に研究が進められている。この学問は定義しづらいが、社会科学分野の専門家も関わり、文化において健康はどのような表現をされているか、どういう意味合いを持っているかということについて研究する。

どの分野でも共通するのは、健康とは医療以外の分野にも影響されているということである。これまでのスウェーデンの文化では、文化と医学と全く関連がないと考えられていた。センターでは、別々の分野で研究するのではなく、複数の分野にまたがる研究を行うことで、医療、医学と文化的な点はスウェーデン社会のみならず、国際的にも社会に利益をもたらす視点ではないかと考えた。

研究以外の分野において、スウェーデンの議会においても、健康と文化の研究がされている。健康と文化の関連に対する、社会的な関心がヨーテボリを中心にスウェーデンで高まっているのだ。このセンターでは、実際にセンター自身が研究するわけではなく、各学部の先生に共同で研究をしてもらおうとしている。

9.2 研究内容

9.2.1 IFK ヨーテボリ

地域のサッカーチームである「IFK ヨーテボリ」というサッカーチームと、社会的持続性との研究をしている。サッカーは社会に、持続可能な健康をもたらしていると考えられている。このサッカーチームが、実際に社会にどのような影響をもたらしているのかについて、研究者をセンターが助けている。例えば、郊外とヨーテボリをつなげるために、サッカーがどのような役割を演じているのか調査をする。

9.2.2 アルメドーラン

政治家や NGO 関係者たちが集まり、キャンプの中で問題解決のためのワークショップなどを実施する、「アルメドーラン」というイベントが、毎年 8 月にゴットランド島で行われている。全国から人が集まる。

9.2.3 ブックフェア

スカンジナビア半島最大の、書籍の祭りが、ブックフェアである。ブックフェアにおいても、健康文化についての啓発を行う。このような活動を行わなければ、学際的な研究にお金をまわすことが難しい。

9.2.4 他の組織との連携

センターとウェイアウト協同組合[11]はコラボレーションをしていて、高齢者の文化的な社会参画について活動している。他の学部とも連携しており、全国文化芸術協会のようなところから基金を

[11]ウェイアウト協同組合(“Vägen ut! kooperativen”)は、労働市場から除外された人を雇おうとする社会的共同組合。後述する。

もらっている。また、世代間のギャップを埋めることが目的の”Meeting Between Cultures without boarder”(国境なき文化同士の出会い)という２年間のプロジェクトがこの４月から始まっている。世代間の交流は、健康にとって重要だ。

ドラマや演劇ワークショップを実施したものを、何年か前に録画した。10 人ぐらいの高齢者が集まり、5 歳になったり、6 歳になったり、85 才になったりして演じるというようなワークショップを行った。一緒にいるということで、お互いに興味を持ちあう。若者と大人はそれぞれを知らなくては、お互いに恐れてしまうから、この活動は、世代別分離についての課題に取り組むアイデアである。

9.2.5 グリーン・リハビリテーション

ガーデニングセラピーのようなものである。文化と健康という範疇だけでなく、自然と健康というテーマも大切にすべきだと言われている。これをグリーン・リハビリテーションという。仕事で「燃え尽き症候群[12]」になった人が、庭の手入れをして立ち直るというものを行い、この近くの植物園にあるグリーンセラピーセンターに雇われて回復していく。このような分野についても、私たちの研究のセンターの範疇なのだ。森林浴もこのリハビリテーションに入る。

9.2.6 建築と健康という分野

病院の窓から見える景色が駐車場なのではなく、木や自然が見える方がリハビリテーションにいいのではないかという考えのもと、研究が行なわれている。ヨーテボリ大学近くのチャルマース工科大学のヘルスケアビルディングで研究が進められており、環境リハビリテーションという分野において、医療建築の学者と学科の専門家が、 持続可能な健康回復の環境の研究をおこなっている。景色と健康との関係が一例として挙げられている。

文化的な違いが医療に与える影響も多く、医療以外の分野も健康に影響を与えているということに医者も気づき始めている。ただ、それに対しての調査がいまだにされていない。

例えば、スウェーデンでは入院すると、基本的に面会は出来ない。日本では面会ができるということを本で知ったのだが、病院が実際にどのような対応を行うかは、それぞれの国の文化から影響を受けているので、文化についても研究しなければならない。

9.2.7 芸術と健康

芸術は道具ではない。体に影響を与えたとしても、芸術は芸術であり、芸術はただ単にいいものを作ることが目的ではない。体にいい・悪いという目的での芸術の活用方法に対する議論は反対されるだろう。

芸術は昔から健康と結びついていた例がある。13 世紀のドイツで考案されたのは、恋の病の治し方（”how to solve love sickness”）だ。それによると、恋の病を治すには４つの方法があるといわれている。

---

[12]燃え尽き症候群：懸命に働いていた人が突然無気力になり、職場に適応できなくなる症状

Ⅰ ワインを飲むこと
Ⅱ 人付き合いをすること
Ⅲ オーケストラを聴くこと
Ⅳ よい話を聞くこと

この方法は興味深い。なぜなら、１３世紀のヨーロッパでは、芸術が身体的治療の一部として期待されていたからだ。音楽や芸術的な活動というのは、例えば麻酔が必要なときに気を紛らわすための一つの方法として使われてきたり、治療として音楽や物語が使われたりもした。しかし、現在、薬の技術や医療が発達するについて薬が重視されるようになり、アートは哲学などの分野でしか使われなくなってきた。

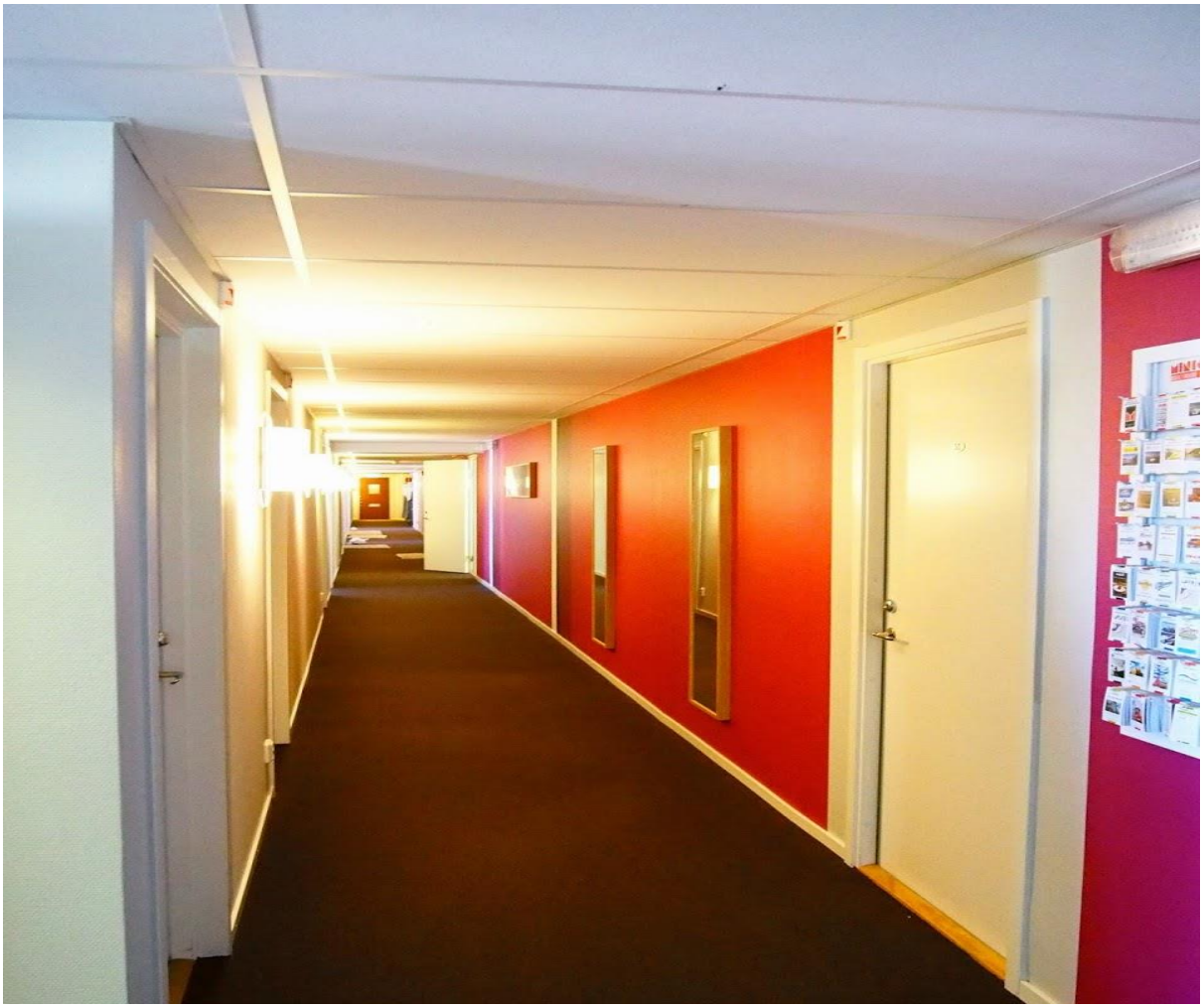
9.3 質疑応答

Q1. このセンターはどのようにコミュニティと関連しているのか
A1. 関連はしているが、このセンターは小さく、コミュニティと関わる時間は限られている。

Q2. アーティストが健康についての本を著すと言ったが、どのようなアーティストなのか
A2. 夏にイベントを行い、そこで何を入れるかを話し合うが、おそらく、この地域を中心に活動している画家ではないか。

Q3. センターでは行われてないが、大学では自殺についても研究が行われている。自殺者を減らすため、どのように人々を社会に溶け込めるようにするのか
A3. 孤立を感じている人が、美術館や劇を見に行くことがある。これは成功していて、人に会ったり、特別なところに行き、人とディスカッションしたりすることを通じて、社会に溶け込めるようにしている。

10 LeMat(リマット) ホテル



日時　　2014 年 6 月 13 日
場所　　Kristinelundsgatan 13, 5 tr 411 35 Göteborg
先方　　ダニエルさん
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　鈴木杏佳

10.1 概要

リマットはウェイアウト協同組合の企業の一つで、労働市場から除外された人を雇う為の雇用口として、機能している。また、リマットは、ヨーテボリのホテルランキングで、86 箇所中の 5 位にランクインするなど、成功を収めている。労働市場から排除された人を雇用しているのは、誰でも働くことができると信じているからである。従来のスウェーデンの社会的に排除されていた人の雇用は、その場しのぎの「偽物の仕事」を与えているだけだった。ホテルの仕事はとても過酷だが、だからこそ、雇用をしたいと考えている。というのは、新しいサービスを提供していれば、誰でも働くことができると考えているからである。

10.2 創業時のリマット

ダニエルさんは「イコール」というプロジェクトをしており、様々な理由で労働市場から除外された、仕事をさせてもらえない人の雇用を行なっていた。欧州国内でのパートナーシップがないといけないので、ドイツ、イングランド、イタリア、ギリシャなどの団体と連携した。その中で出会った人からリマットというプロジェクトがあるということを聞き、一緒に協力したいと思った。というのも、「元犯罪者は、労働市場だけでなく社会からも排除されている」という、自分と全く同じ価値観を持っていたからであった。

精神病院の患者とスタッフが一緒になって、リマットをはじめた。病院が建物の一部を企業に貸し出すことを考えていて、そこで、患者と病院のスタッフがランチを提供するお店をすることになった。それをはじめたときに、ホテル事業も同時に始めた。それがリマットである。そのときは元犯罪者だけを対象にしていたわけではなく、社会的に排除されていた、盲目、障害などを持っていた人も雇用の対象としていた。

リマットの始まりはイタリアであり、この活動を拡大したいと思い、スウェーデンでも創業した。イタリアには 20 以上のリマットホテルがあるが、そのすべての場所には共通した考えがある。それは、雇用のときに、すべての人がこのホテルの所有者になるように、と考えていることである。2010 年にこのホテルを開いたときも同じ方法で従業員を集めることにした。

リマットはフランス語で、タロットカードの「愚者」を示す。このカードは、自由、旅立ち、放浪などを意味する。リマットはただ単に私たちがつけた名前なのではなく、その名前自体に歴史がある。普通の人は、なにか失敗すると常に心に壁のようなものができてしまうが、愚者は違うのだ。

10.3 現在の雇用状況

様々な異なる背景を伴う人を雇っている。現在、ヨーテボリのリマットでは、25 歳から 68 歳までが働いている。男女比は 1:1 であり、様々な国籍の人が働いている。大事だと思うのは、すべての職場で社会の構成を反映させることだと私は思っている。そうすることは、良い労働環境を整える唯一の方法であり、それが人と人が出会える環境になると考えている。どんな背景を持った人でも、学ぶことができるので、オープンマインドになることが一番重要である。

また、10 人の雇用者のうち 5 人は、共同経営者という立場である。共同経営者になるために特別な資格は必要ないが、3 年以上働いていることが条件である。

実際に、履歴書に何も書くことがない人でも、ここで働くことができる。皆人間で、誰かの面倒を見ることができるから、お客さんの面倒も見ることができると考えている。

10.4 経営について

スウェーデン国内やポーランド、イギリスでもこのビジネスを拡大していきたいと思っている。これはただ単に経営しているわけではなく、誰でも経営をすることができるということを示すだろう。喜ばしいことに、これからストックホルムとマルメでも、リマットを開業することができる予定だ。そうすると、3 つの主要都市すべてに開業できることになり、マーケットを拡大することができるだろう。

© 2014 YEC(若者エンパワメント委員会)

リマットは、事業を継続するために、他のホテルと同じように、ホテルの経営をビジネスとして行っている。

始めたときは、内装を変えることや、空調設備を設置するために、お金が必要だった。しかし、仕事がない人を雇うことにしていたので、銀行でお金を借りることができず、ウェイアウト協同組合の他の会社からお金を借りることや、社会的事業をしている他の会社からお金を借りて賄った。

10.5 質疑応答

Q1. 雇用しない人はいるのか

A1. 犯罪者や、依存症の人は雇用していない。ここは職業訓練の場所ではないので、労働弱者に向けた、求人広告などを出していない。というのは、ウェイアウト協同組合でやっているのは、その場しのぎの雇用ではなく、真の雇用だから。職業訓練から来ている人を雇ったら、ここですぐ働けることにもなる。

ここに来る人はいろいろな社会的背景を持っている人がいるけれど、その人の過去よりも、今日、明日が大事だと思っている。もし、私たちがそういった過去に対して一方的な価値をつけてしまったら、私たちはその人の未来を失わせてしまうだろう。

11 Solberg Behandlingshem och boende(トリートメントセンター)

日時　　2014 年 6 月 13 日 10:00～11:30
場所　　Behandlingshem och boende - Solberg Sörgårdsväg 5 423 72 Säve
先方　　トミーさん
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　鈴木杏佳

11.1 概要

Solberg Behandlingshem och boende（ソルバーグ トリートメントセンター）は、ウェイアウト協同組合の施設のひとつである。主に薬物中毒者や犯罪者が、社会に復帰するための訓練をする施設である。大人たちが、ゆっくりと社会に復帰することを目的にしている。

４人でこの施設を立ち上げたが、全員が依存症で、３人は元犯罪者だった。この施設は EU の基金に申請し助成金を得て、創設された。リマットのマネージャのダニエルさんも、その４人のうちの１人であった。2003 年に、ヨーテボリの市役所からウェイアウト組合の社長であるパニーラさんが、市や刑務所の人とコンタクトをとり、この施設を借り入れた。

現在は７人を雇用していて、24 時間勤務している人が３人、３人がセラピストで、４人がモチベータである。モチベータの仕事は、施設の利用者と話をすることや、いろんな形でサポートすること、別の施設と連絡をとることである。土日はセラピストがいない。因みに、雇用者７人全員が、元々アルコール依存症や犯罪者である。したがって、治療の過程には、理論もあれば、経験則もある。

以前はここに居るためには、少なくとも、毎日仕事や学校に行っていることが条件だった。しかし、今は逆に、治療に専念するために、仕事や学校に行く事を許していない。この施設を利用する９割の人が元受刑者であり、スウェーデン全土から集まっている。ここでの飲酒や、ドラッグは許されていない。また、この施設は男性のみを対象にしている。

家族を持っている人たちは、週末だけ家族に会える。刑務所に入っているときでも会うことができるが、その際は、家族や子どもと面談できる場所が刑務所の中に用意されている。

11.2 活動内容

12 段階の治療方法というものがあり、それを行っている。最初は需要がなかった。というのも、ここはアメリカにあるハーフウェイハウス[13]を参考にしたからだ。２年前からアルコール依存症や薬物依存の人の治療を始めた。１週間あたりの合計治療時間が２０時間以上でなければいけないのがこの手法であり、セラピスト３人と進めている。最終的に、それぞれのテーマに分かれて、「恥じらい」「罪」「怒り」について考える。だいたい３ヶ月から６ヶ月くらい行なった後、社会復帰をして、仕事に就く。

スウェーデンの法律によると、日本の執行猶予と同じようなもので刑期のうち 1/3 は刑務所外で過ごし、この期間は刑務所から補助が出る。この施設の利用者は、前述したように受刑者であり、執行猶予期間中である。この施設での社会復帰プログラムのなかで、ルールを守れなかった人は、また刑務所に戻ることになる。それは刑務所に入った人には、人生を変えるチャンスがあると考えられているからだ。この治療はすごく我慢が必要で、感情的なものであり、たえきれずに帰る人もいる。ここに来る利用者の３割がプログラムを終了することができる(7 割は何かしらの理由で刑務所に戻る)。

11.3 質疑応答

Q1. 結婚している人が捕まった場合、配偶者や家族はどう生活するのか。

A1. 場合により異なるが、刑務所の中にいる人でも権利があると考えられているので、たとえ犯罪者でも、家族が生きるための最低のお金が国から出る。別の団体で、レスニングという NGO があり、親が刑務所に入っている子どもに対して、気持ちが共有できる場所を提供している。とにかく、ゆっくりと時間をかけて、治療に専念してもらうことが多い。なぜなら、ここに来る人たちの多くは、長い間中毒などに苛まれていた人たちだからだ。

Q2. 外部との連絡をとることなどは可能か

A2. 最初の２週間は、連絡手段を排除して、治療に専念してもらう。それ以降は、自分の携帯電話やパソコンを使って良い。友達などとも連絡をとってよいが、会うことが許されているのは家族だけである。また、土日は街に行って誰かと会っても良い。ただし、出かけてよいのは３時間だけである。刑期なので、刑務所に外出許可を申請しなければならない。

Q3. 近隣住民との関係はどうか

A3. 良好である。名前が「太陽の山の村」と書いてあるので、いい農場だと思われているのではないか。

---

[13]ハーフフェイハウス：社会復帰訓練所のこと。犯罪者や精神病患者が、社会復帰や自立的生活を目標として、一時的に居住する家のこと。

12 Lärjeåns Café & Gardens

日時　　2014 年 06 月 13 日 12:00～15:00
場所　　Lärjeåns Café & Gardens - Fiskhamnsgatan 41 D 414　58 Göteborg
先方　　スザンナさん、ノラさん
当方　　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　鈴木貫司

12.1 施設概要

農園レストランで、その場でとれた野菜を調理して提供する。ウェイアウト協同組合としては、社会に再び出るためのリハビリとして、農作業や接客に携わっている。建物と土地をウェイアウトが買い取り、2010 年にオープンした。ここを買い取ったときは建物はレストランをやれるような状態ではなかったが、ウェイアウト協同組合が新しく建物を立て直した。

リハビリでここに通っている人は、38 人いて（実習生を含む）、毎日来る人もいれば、週に 2,3 日来る人もいる。その人の健康状態によって週に来る日数も変わっている。（視察に行った日は 15 人が働いていた。）

ウェイアウト協同組合ができたときは雇用するのは薬物依存、犯罪歴がある人だけだったが、今は雇う範囲を広げている。現在、ここで働いている 95%が、職業訓練をしている人、もしくは自発的に働いている人で、一度も働いたことのない人や、障害を持った人たちである。ここは孤立を無くす場所であり、障害者、犯罪者、うつになった人、燃え尽き症候群の人を雇用する。

12.2 庭園

有機栽培を行なっているが、ライセンスを取得していないので、「有機野菜」として売り出すことはできない。お店で提供する材料や、市場に売り出すものも作っている。

ビニールハウスは、ミーティングの際にも使う場所で、自身を振り返るときにも使う。ミーティングの議題の例としては、どうやって各々の農場の片づけをするか、心配事の相談などがある。

12.3 担当してくれた方について

スザンナさん

学歴がなく、さらに犯罪歴があったので、雇ってもらえる場がなかった。しかし、家計を支えなくてはならないので、労働局に行き、2008 年に実習生となり、6 か月の実習ののち雇われた。その 1 年半後、ここのマネージャになり、ウェイアウト協同組合の最高責任者の 1 人になった。彼女自身、この施設での成長を実感している。

ノラさん

ボスニアから来ている。週に２～３日働いている。元々は実習生であったが、今は雇われている。彼女は自分の畑をボスニアに持っていた。一度もスウェーデンで働いたことがなかったが、今はここで働いている。

人と目も合わせられないような女性が、雇われてから有能な人材になった。今、その女性はここにうまくつなげられてない人をつなげるような仕事をしたいと言っている。

12.4 質疑応答

Q1. ここへ来る人はどのように変わったのか

A1. 人が変わるにはすごく時間がかかる。雇用局は 3～6 ヶ月で送るが、それでは足りず、実際は 1～2 年くらいの時間が必要である。働きたくないため、ずっとここにいる人もいる。スザンナさんはここで「コンタクトパーソン」をやっていたが、そのときは一緒に本を読んだり、一緒にいたりして、実習生自身が自分を管理するサポートした。最も大事なことは、どのようにしてその人たちにアプローチするかということである。多くの薬物中毒の人は、薬物の陽性反応が何回か出ると一度この施設から離れなければならない。しかしながら、1 回薬物の陽性反応がでてもすぐにプロジェクトから追い出すことはしない。

Q2. どうやってリハビリテーション（職業訓練）をしているか

A2. 毎朝今日何をするかを話し合って計画をする。畑仕事や自分のやりたいプロジェクトをやってもいい。ただ、すべての人が自分のプロジェクトができるわけではない。それはバランスの問題で、レストランで使う野菜もあり、お金を生み出さなければならないからである。

13 Kajskjul46（カイフー46）

日時　2014 年 6 月 13 日 15:00～17:00
場所　Vägen ut! Kajskjul46 - Fiskhamnsgatan 41 D 414 58 Göteborg
先方　ティナさん、パニーラさん、グニッラさん、アンクトロさん
当方　両角達平、土肥潤也、鈴木貫司、武田清香、長島佳寿美、鈴木杏佳、水島滉大、宇野彩子
担当者　長島佳寿美

13.1 施設概要

社会から除外されている人の雇用のための場として作られた。2003 年に始まり、現在は受刑者の生活を支援するための組織を作り、全 80 名以上の従業員と 100 人以上の参加者を持つ。「真の雇用」を目標とし、活動をしている。平日の 9:00～16:00 に営業している。

13.1.1 団体設立の話

ティナさんも参加した 2002 年のイタリアのスタディツアーが活動のきっかけであった。社会的協同組合（kooperative）についての視察ツアーで、政治犯で 25 年間刑務所にいた人が、「made in jail（刑務所で作成）」というブランドのビジネスをはじめた。スクリーン印刷を利用して、刑務所内で作った商品を外で売るというビジネスを、刑務所内でしており、その政治犯がやがて出所してから、社会的協同組合を設立した。

その後、若者のための社会的協同組合を設立した。この組合の活動は、刑務所にいる若者が外で作業をすることができ、夜刑務所に戻ってくるというものだった。2004 年にヨーテボリのスウェーデン人が手伝って、スウェーデンでも設立された。ヨーテボリで立ち上げる際に、クリス（という団体）と共同で作り、その時、グニラさんもティナさんも、クリスのメンバーだった。

このプロジェクトのメンバーのひとりが、薬物依存から抜け出したばかりのパトリックさんを誘った。その後、社会的協同組合というものがどのようなものなのかについて勉強をした。犯罪者であったので、そのようなことは勉強したことはなかった。ヨーテボリで設立する為の準備を 1 年行った後に、今のような最高の場所を見つけた。何か始めるときに、車が必要ならガレージが要るように、スクリーンペインティングをするところが必要だったので、私たちにはこの場所がぴったりだった。

この場所を契約するつもりだったが、元受刑者、薬物依存者が利用すると説明したら、契約を断られたことが何回かあった。元受刑者の人たちだけでなく、ソーシャルワーカーとして働いている人たちも関わって、ウェイアウトのある事業に場所を貸していた会社が別の場所を貸してくれた。とても大きな場所を見つけて、3 人が働くことになった。一方、ウェイアウト協同組合の人が、6 人で狭い部屋を使っているところがあったため、一緒に働くことになった。まず、テキスタイル印刷（捺染）と庭園事業を始めた。

13.2 事業について

ウェイアウトの中で、なにか建物を建てることが必要になることが多くなり、それなら建築会社をウェイアウト協同組合の中に作ろうと決断し、リノベーションを始めた。リマットがあったところは、もともと歯医者であったため、ウェイアウト協同組合の建築業でリフォームを行なった。

13.2.1 スウェーデン刑務所保護観察サービス

ハローワークで働く人が刑務所に派遣されて、刑務所の中の人の就労支援をしており、ハローワークの仕事を刑務所内で行なっている。アンクトロさんがこのサービスで働いている。ウェイアウトと刑務所とが共同でプロジェクトを行なっており、４つの刑務所でこのようなプロジェクトを進めている。社会的職業訓練をうけさせることが目的であるが、これには女性の方が多く訪れる。理由は、男性に比べて女性の方が、元犯罪者であると就職に苦労するからである。

13.3 主な事業活動

13.3.1 グリーンサービス（庭園事業）

邸宅から雇われ、植木の手入れの契約をする。既にある庭ではなく、新しく建築でデザインするということもはじめた。例えばスポーツ公園のデザインなどである。

13.3.2 テキスタイル印刷

スウェーデンで有名な技術で、捺染、染め物のことである。古い着物などの布を使って、新しいなにかを作ったりもした。椅子を古いソファとかの材料から作ったり、古いものをスクリーンプリンティングと再生利用を組み合わせたりして作ることもある。

13.3.3 職業訓練

50 人がここで職業訓練を受けており、現在 21 人の従業員がいる。長い期間失業していた人（精神的に問題がある人）でもここで働くことができる。いつもここで人を雇うときは、ここで職業訓練をしている人を優先する。もし見つからなかったら、ウェイアウト協同組合の他の場所で職業訓練をしている人を優先して雇用する。21 人の雇っている従業員のうち、2 人（アニリさんとマリアさん）は、ここでもともと職業訓練を受けていない。アニリさんは、ウェイアウトガーデンで働き、そのあとここで働きはじめた。アニリさん、マリアさんを除いたすべての雇用した人は、ここで職業訓練を受けた人だ。

キッチンは職業訓練のためにも使われており、スウェーデン料理などをみんなで作って食べる。ある日はベジタリアンの人の為に作ったりもする。金曜日は、残り物を全部食べる日にしている。残り物がなくなり、環境に優しいからである。

13.3.4 リマットとの協力

ウェイアウト協同組合が行なっているホテル事業で、視察班が実際に泊まったホテルでもあるリマットのタオルやバスローブをここで洗う事業をしている。シーツは、洗う器具やスペースなどのコストがかかるので、別のところで洗っている。

13.4 質疑応答

Q1. 職業訓練を受ける場合、失業回数などなにか条件はあるのか

A1. 特にない。少ない人で１ヶ月、多い人は２年６か月の失業期間を経て働いている。

Q2. （刑務所で行われている就労支援について）なぜ男性の受刑者のほうが社会に戻りやすいのか

A2. 男性の元犯罪者の人だと、面倒を見てくれる人がいるから。かっこよく、魅力的に見えるそうだ。しかしながら、女性の犯罪者は批判的にみられ、こんな人に子どもを育てられたくないと思われてしまう傾向にあり、誰も相手にしてくれないため、社会的地位に差がある。スウェーデンは男女の平等でとても有名だが、元犯罪者の評価については、大きな差がある。

Q3. 社会的協同組合（Social corporative）と社会的企業（Social enterprise）の違いはなにか

A3. 従業員が企業の所有者である形態のことを、協同組合という。日本では生協が例として挙げられる。社会的企業は業務形態であり、再投資の投資先が違う。利益を株主に分配することなく、会社の雇用のために利用する。

Q4. 社会的協同組合を定義・登録する法律があるか

A4. 協同組合であるためには、最低３人の役員が必要である。例えば、自主経営であったらひとりでもよいのだが、社会的協同組合では３人が所有することが必要である。さらに、協同組合はひとつの経営体に過ぎないので、社会的になるためには、雇用、就学等、なにか打ち込めるものに会社内の利益を会社内で投資する必要がある。社会的協同組合と宣言することは、株主などにお金を再分配しないことを宣言するということだ。社会的協同組合は自分の会社に再投資をする。より多くの人を雇ったり、職業訓練のためにお金を払ったり、人件費を払ったり、社会の弱者に向けて投資をするのである。

Q5. 社会的協同組合になったら税金は下がるのか

A5. スウェーデンでは税率の違いはない。

Ⅵ まとめ

視察を通して各メンバーが得られたこと

土肥 潤也 （静岡県立大学 経営情報学部２年・YEC 代表）

私がこの視察を通して最も感じたことは、スウェーデンのひとりひとりの市民に「民主主義」が根付いていること、そして、その「民主主義」を持続可能なものにしていくためには不断の努力が日々必要とされることだ。

今回の視察では、「民主主義」について尋ねているわけではないのに、あらゆる場面で「民主主義」という言葉が出てきた。それほどに、様々な先進的な取り組みの根本に民主主義があり、逆手に考えると、「民主主義」というものが根付いているからこそ、スウェーデンでは「ユースワーク」が実践されているのではないだろうか。

ヨーテボリに滞在している間に、現地の方とスウェーデンの男女平等について話す機会があった。そこで、私は「なぜ、こんなにもスウェーデンでは平等が実現されているのだろうか？」と尋ねた。そうすると、彼女は「権利があるから、そんなことは当たり前だよ」と答えたのが、衝撃的だったのを覚えている。

市民ひとりひとりに根付く、「民主主義」やシティズンという意識は、日本国内で語られる「民主主義」とは異なるもので、すべてのシティズンには、社会をよりよくしていくための責任がある。それは、必ずしも自分の権利を保持することなどの、個人の利益に目を向けたものではなく、社会に対する責任である。

スウェーデンでは、すべての市民は社会に所属している。だからこそ、当事者意識を持ち、全ての市民が自分たちの責任（社会をよりよくすること）を果たすのだ。ここで述べる社会への責任とは、決して社会に働きかける活動をすることや、投票に行くことではなく、単純に自分が社会の中で影響力を持っているという自覚から生まれる責任である。

私たちは、スウェーデンのこんな国民性から、私たちなりに「民主主義」とは何かということについて考え、今の日本の現状に目を向けていなかければいけない。そして、それこそが、自分の住んでいる国をよりよくしていくことに繋がるのだと考えている。

鈴木 貫司 （常葉大学 教育学部２年・視察ツアー責任者）

私は、スウェーデンに行った先輩方の話や資料からの事前情報で、スウェーデンは民主主義の先進国と言われていることを知っていたので、今回の視察では、それを肌で感じたいと思い参加した。

実際、スウェーデンの視察先で話を聞くと、「人を尊重するのが当たり前」ということや「すべての人が同じ権利を持っている」と考えていることがとても伝わり、これが民主主義ということなのかなと思った。

若者は既に社会の一員であり、社会に参画する権利を持っている。しかし、若者が社会へ参加するためには、ハードルが大人よりも高い。そのため、エンパワメントすることで、若者自身、それから社会の若者に対する関わり方や見方が変わっていく。今回視察した施設では、若者施設におい

ての社会に参画する権利だけではなく、ウェイアウト財団などの薬物中毒、元犯罪者、うつ病の人など、すべての人が働く権利をもっていて、自分の権利を含め守っていくことが大切にしているということを感じた。

また、スウェーデンでは、社会をすごく身近に感じることができる機会が多くあり、そこで若者が影響力をもち、身近な環境を変えて行くことに重点が置かれている。このような社会への意思決定を経験していくことで、「社会そのもの」と「社会に影響を与えることができる自分自身」というものの捉え方が変わって行くのだと思う。

今、日本では、社会というと、政治などを大きなものとして、自分は参加できないと考えてしまう。でも、社会は人ということで、実際はもっと小さなところからも社会であるという実感できる機会がより多くあれば、他人事でなく、社会に参画していける人になるのだと思う。

そして、民主主義ともつながっている要素ですが、意思決定の大切さ。自分や周りの環境に対して対話を行った上で決定する権利をもっていて、その権利を周りの大人からも保証されている。自分に関わる環境が一番小さな社会でそこへ影響力を持つことが本当に大切なことでもあると思う。

このように意思決定を子どもの時から繰り返し、身近な社会を変えて行く経験をする機会をもっと日本に増やして行くこと。YEC もその機会を作る活動の一つとして続けて行きたいと思う。そして、スウェーデンで見たこと、聞いたこと、肌で感じたことは一生の経験になったと思う。

最後に今回視察を実現できたのはスウェーデンで視察を受け入れてくださった方々、通訳とコーディネートをしてくれた達平さんをはじめとする方々のおかげであり、感謝申し上げる。

長島 佳寿美 （静岡県立大学 国際関係学部２年）

私がこのツアーに参加しようを思ったきっかけは、ＹＥＣでのミーティングでスウェーデンに行けるという情報を聞き、興味を持ったからである。私はスウェーデンに詳しくなかったが、スウェーデンが「民主主義の先進国」と聞いて、実際に何が日本と違うのかを知りたくてこのツアーに参加した。このツアー実施にあたり、津富先生を始め、視察先で通訳を行って下さった達平さん、スウェーデン視察先の担当の方々、ＹＥＣのメンバー、さらには助成金を下さった「ササカワ財団」に感謝している。このツアーで協力してくださった方々のおかげで私たちが無事にツアーを終えることが出来たからである。

私がこのツアーで感じたことは、人々が社会に対して行動をおこす機会がスウェーデンでは充実していることである。若者は放課後に家に帰るのではなく、ユースセンターや図書館に行き、市民と接する機会が多い。また、受刑者の方、社会的に排除されている方が社会で働いていけるように、ウェイアウトのような労働のリハビリテーションの場が与えられている。

このように、社会と関わる機会が充実していることで、彼らは「社会」を身近に感じられるのではないかと思った。「社会」が決して遠い存在ではなく、自身が影響を与えられるような身近な場所に存在していることを、スウェーデンの人々は生活してくなかで、感じられているのだと思う。

私が視察で感じたスウェーデンの今後の課題に移民問題が挙げられる。私がストックホルム駅で驚いたことは、道路で募金をお願いしている移民が日本よりはるかに多く、ホームレスがほとんど移民であることだ。また、あるユースセンターでは、ほとんどの利用者が移民であり、彼らは仲間

や友達を見つけるためにユースセンターに集まってくる。移民問題はある種の社会の分化をもたらすと思う。若者が社会に影響をもたらすことが出来る場や機会を提供するように、移民がスウェーデンの社会に影響を与える機会の提供が必要であると感じた。

最後に、このツアーで経験したことは他では感じることのできない、貴重な体験であり、このツアーへの参加を奨励してくれた親に感謝する。また、このツアーで得たことを今後の勉強に活用していきたいと思う。

鈴木 杏佳 （静岡農業高校２年）

今回のツアーは「ただ海外の同じ年代の人ってどんなことしているのだろう」、ただそれだけが知りたくて参加したいと思った。私は高校２年で、高校を休むということに少し抵抗もあったし、勉強面や部活面での不安もあった。でも、顧問の津富先生をはじめメンバーのみんなの支えがあってこのツアーに参加したいということを親に伝えた。そして、ツアーに行けることになって本当に嬉しかった。まずは助成金を頂いたササカワ財団さんや津富先生、通訳をしてくれた達平さん、YEC メンバー、親に感謝している。そして、このツアーに行けるのは当たり前ではないし、高校を休んでもいいと言ってくれた担任の先生や学年の先生にも感謝している。

スウェーデン視察で私が感じたことは、大人は若者を、「若者」「中学生」「高校生」としてではなく、かけがえのない「一人の人間」として価値を持っているのだということを頭に置いていること。そして、「みんなでみんなの夢を叶える」ということだった。たくさんの施設を視察し「誰かがこうしたい」と思ったことを周りの人を巻き込みながら実現していた。ユースセンターで若者がやりたいと思った企画を大人が支えながら、同年代の人を巻き込み実現していた。それは、YEC の「放課後探しプロジェクト」と同じようなことだと思った。スウェーデンで行っていたことは、県や市で企画を進めていた。YEC の活動は行政を巻き込み企画を進めることはあまりないように思う。しかし、例えどんなに小さな企画でも、その企画を企画した本人にとっては「大きな夢」なのかもしれない。そして、その小さな夢を実現することで、若者が元気に暮らせるようになるのではないだろうか。

私は、若者、中高校生世代の当事者として若者支援の問題を考えることができる。それは、YEC の大学生メンバーには出来ないこと。それは、私だからこそ出来ることだ。私の周りには「小さな夢」を持った友達がたくさんいる。その夢を一緒に叶えたいと思う。私はスウェーデンから帰国し、何を学んだか。それは言葉にできないほどたくさんある。しかし、このツアーで１つ夢ができた。周りの人から見たらそれはとても小さくてこれっぽっちの夢かもしれない。でも、私にとっては大きな大きな夢。夢を叶えるために、少しずつ自分に正直に学んでいこうと思う。このスウェーデン視察で大切な夢を見つけた。

きっとこれからが始まりだと思う。

武田 清香 （静岡県立大学 国際関係学部２年）

私は YEC として活動するなら一度は、スウェーデンを含めた北欧に行ってみたかった。また、YEC のもととなっている考え方は、北欧に行けば体感し理解できると聞いていた。なので、今回スウェーデンに行けることになり、私はとても嬉しかった。

スウェーデンに行き、まず感じたことは、人種の多様さである。よく知られているように、スウェーデンは移民が多い国である。日本にいると周りはほぼ日本人である。時には中国人や韓国人もいるが同じアジア系であるため、見た目に大きな違いは感じない。しかしスウェーデンに行くと、様々な人種の人が街を歩いている。ユースセンターでお話を聞いていると、そのユースセンターができた根拠になっている政策は、移民に対する政策だということがあった。

また、スウェーデンでは、若者も大人と同じように社会の一員であるという考えの元、若者政策が充実している。子どもは子どもだからと意見にあまり耳を傾けてもらえないのではなく、意見を言えるようになるために必要な知識を教えてもらえる機会が与えられる。

この視察を通して私が感じたことは、民主主義に対する考え方の違いである。子どもであろうと大人であろうと、移民であろうと、一人ひとりが人間として見られ、意見が尊重される。すべての人の意見に耳を傾けようとする姿勢がある。若者政策は民主主義のための政策の一つなのではないかと感じた。移民政策も同様である。民主主義に対する考え方の違いを感じた。スウェーデンの制度をそのまま日本に組み入れても、文化・習慣が異なるため、うまくいくとは思わない。すべての移民が普通に暮らしているわけでもなく、道端で物乞いをしている移民風の人たちもいた。しかし、スウェーデンの民主主義に対する考え方や制度は今後の日本のための良いヒントになるのではないだろうか。

水島 滉大 （静岡県立大学 経営情報学部２年）

スウェーデン視察で一番強く感じたことは、多くの意思決定に若者が関わっていることである。ユースセンターをはじめ、学校、行政にも若者の声を積極的に取り入れており、若者自体がメンバーになっているところすらある。若者の意思決定への参加率は、投票率を見れば容易にわかることだろう。

日本では、圧倒的に、若者が意思決定に参加することのできる機会が少ない。しかしながら、ただ参加する機会が少ないのではなく、その機会に気づけていないということも起きているのではないかと考えた。

それはどういうことか。つまり日本では、情報をうまく一人ひとりに伝えることができていないのだ。若者が参加することのできる意思決定の場があったとしても、最初からそれに興味のある人に対してしか伝わらないのではないか。政治に興味のない若者の意見は本当に必要のない意見なのか。そのような偏りのある状態で、よい社会になるだろうか。

ではどうするべきか。結論から言おう。大人が若者のチカラを信じて、若者の声を聞き、若者と一緒に考えようとするのだ。現状、なぜ若者は社会に参画できていないのか。それは、大人が本気で若者の声を聞こうとしていないからなのではないか。若者は社会をよりよくしていくチカラがあ

り、様々なアイデアを持っているのに、それを持っていると信じていないから、形式的に若者の声を聞こうとするだけで終わってしまい、本当に聞きたいことを聞けずにいるのだ。

私がスウェーデンから得られた示唆は、YEC の理念と合致していたのだ。「社会へのアプローチ」として、「若者はこれほどのチカラを持っているのだ」ということを知ってもらい、若者と一緒に社会を作り上げていくことの大切さを理解してもらう。そして、「若者へのアプローチ」として、若者自身に、自分にはチカラがあるということを認識し、発揮できるようにする。これこそ、スウェーデンで私たちが得られた示唆であり、YEC がこれから活動してゆく使命になるのではないだろうか。私たちが担っている役割は、これからの静岡、これからの日本にとって、とても重要な役割なのだと、強く思っている。

Ⅶ おわりに

最後に、この視察報告書の制作の責任者である水島から、視察全体やこの報告書の制作を通して、お世話になった方々への謝辞を述べさせて頂く。

私たちが、このような有意義なスウェーデン視察を行うことができたのは、様々な方々の協力のもとであった。この視察の趣旨に賛同していただき、助成をしていただいた「スカンジナビア･ニッポン ササカワ財団」の方々をはじめ、事前準備から資料の翻訳や事後の報告会の内容まで様々な面で私たちを支えてくださった顧問の津富宏教授、YEC の創設者であり現地では案内や通訳をしてくださった両角達平さん、ヨーテボリでのコーディネートをしてくださったヨルバさんやラースさん、スウェーデンで視察させていただいた各施設の皆さんには、視察メンバー一同、深く感謝申し上げる。また、この視察においてリーダーシップをとってくれた鈴木貫司くんにも、とても感謝している。

この視察報告書に至っても、私や視察メンバーだけの力ではなく、他の YEC のメンバーや OBOG の方々、それから大学の先生がたにも協力を頂いて、完成させることができた。関わっていただいたすべての方々に心から感謝する。

長い時間をかけた甲斐あって、充実した内容の報告書が出来上がったと考えている。この報告書から私たち YEC が見てきたこと、日本に通じる示唆などを感じていただき、これから私たちはどのようなことをしていけばいいのか、共に考えるきっかけになれば幸いである。

2014 年 8 月 27 日

YEC(若者エンパワメント委員会) スウェーデン視察メンバー 一同

当報告書「スウェーデン視察報告書 2014」は YEC(若者エンパワメント委員会)が
すべての権利を保有しますが、YEC の目的に適合した形での再配布を許可します。

[Mail] yec.information@gmail.com [Web] http://youth-empowerment.jimdo.com/